
サクラ大戦～新たなる剣～

まりー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サクラ大戦〜新たなる剣〜

【Nコード】

N3696K

【作者名】

まりー

【あらすじ】

ある一つの事件が少年の運命と在り方を変える…主人公、柊 優也はあるものにより大正時代に飛ばされる。その時代で彼は様々な人と出会い、その人達を護るために悪と戦っていくことになる。彼の辿る運命は…。

小説初挑戦です。

所々ガンダムの技や他のゲームのネタがあり、原作設定からかけ離

れた作品になっておりますので、嫌な方は閲覧をお勧めしません。

文章に多々おかしい部分が見られると思いますが、辛抱強くお付き合いください。

プロローグ（前書き）

この作品は原作にはない設定やキャラが多数登場します。ご注意ください。

プロローグ

大正時代：帝都東京には【帝国華撃団】と呼ばれし乙女達がいた。乙女達は自身の持てる全ての力を使って戦い、帝都をあらゆる悪から守り抜いた。

時は流れ西暦2400年、世界の文明は今よりさらに発達しほぼ全ての機械が半自動化し、人類に行けない所は過去や未来以外無くなった。

人々はその文明の恩恵を受け、このまま永遠に平和が続くと皆疑いもしなかった。

西暦2478年、ある事件が一人の少年の運命を大きく変えることになる…。

第一話 開幕（前書き）

第一話

開幕

第一話 開幕

2478年春、東京：

一人の少年が歴史資料館である機体を見つめていた。

少年の名は「柊^{ヒイラギ} 優也^{ユウヤ}」。つい先日、軍事学校を卒業したばかりである。

「…俺もこの機体に乗って戦った人たちのように強くなりたい…」

「また【光武】を見てるの？柊君？」

「水瀬さん？」

優也に声をかけたのは、「水瀬^{ミナセ}春香^{ハルカ}」。優也の一年先輩で誰もが認める美少女である。

「好きだね、柊君。【光武】見るの。見てて飽きない？」

「飽きないですよ。俺はあの【帝国華撃団】より強くなるのが目標ですから。」

「そう？君の装備十分に強いと思うけど？」

「水瀬さんの方が強いですよ。」

これは紛れも無い真実だ。

俺たち軍事学校生は、入学と同時に自分達専用の機体を持たされる。

…と言っても【光武】のような機体ではなく腕に装着した変換デバイスから粒子変換した武装や装甲を全身に装着するものだが。

「水瀬さんの機械が羨ましいです。」

水瀬さんの機体は武装、機体性能共に反則と言って良い。比べて俺の機械は少々見劣りする。だが…

「柊君には「プロト」があるよ！自信持って！」

そう…俺の機体には他の機体には無い特殊なシステムがある。

「自律推論型戦闘AI「プロト」」

俺の機体はプロトのサポートもあってなかなかの成績を誇っていた。

「それでも、もっと強くなりたいんです。」

「毎回言ってるね。それ。」

水瀬さんに笑われる…。だけど俺は本気だ！

「俺は本気です。」

「そうなんだ…格好いいね！」

予想外の言葉に少し戸惑ってしまふ。

「そうですか？」

「ウン！格好いい！」

その言葉がとても嬉しい。

「ありがとう！水瀬さん！」

自然と顔が笑顔になる。

俺の笑顔を見た水瀬さんは、小声で何か言っていた。

「どうかしました？水瀬さん？」

少し気になったので尋ねてみる。

「な、なんでもないよ！」

何でもないみたいだ。

「…柊君。」

「何ですか？水瀬さん。」

「今日の夜…時間空いてる？」

今日の夜？今日の夜は…

「空いてますけど…？」

「じゃあ…今夜7時に街の広場に来て！約束だよ！」

「何の用か知りませんが…わかりました。」

水瀬さんと約束し、俺は一旦資料館を出て自宅に帰った。

その夜…少し家を出るのが遅くなったこともあり、俺は水瀬さんを待たせないよう急ぎ足で広場へと向かっていた。

「ん？街の様子がおかしい。…なんだ？」

嫌な予感がする。

「プロト、何か様子がおかしくない？」

俺は一心同体であるAIに聞いてみることにした。

『…街で何者かが軍と戦闘中。』

プロトは考え得る限り最悪の答えを示した。

「何？間違いないの？」

確認したその瞬間、広場から火柱が上がった。

「プロト！行くよ！」

『侵入するならば武装の展開を推奨する。』

「分かってる！」

俺は左腕の変換デバイスを起動し武装を展開した。

体は白い装甲で覆われ、右手には某機 戦士が使っような銃が、左腕には武器兼防具の可変防楯が装着された。

「急ごう！」

『了解。』

俺達は街に向かって駆け出した。

「これは…酷い…」

街はさながら地獄だった。

あちこちから火の手が上がり、建物は壊され、街を必死に守ろうとしたであろう軍隊の機体の残骸があちこちに散乱していた。

「誰がこんな酷い事を…、！先生！何があつたんですか！？」

恩師の姿を見つけ事情を聞く。

「柊か！？逃げる！奴は…」「先生？」

あの化け物みたいに強い先生がこんな事を言うなんて…何があつたんだ！？

「柊、もう一度言う、今すぐ逃げる！あの女は…」

『私がどうかしたのかしら？』

後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。

「…水瀬さん！？どういうこと！？」

彼女は自身の装備である金色の装甲、左腕に爪状の籠手、右腕に俺と同じような多目的兵装を展開していた。

「…あいつはいきなり我々と街を攻撃した。我々も応戦したが、奴には歯が立たなかった。」

彼女が…こんな酷いことを…

「水瀬…俺は…俺はお前を許さない！」

「柊、落ち着け！奴は…じゃないぞ！」

先生が何か忠告した。しかし彼女への怒りで頭に血が上った俺の耳には全ては聞き取れなかった。

「水瀬ええ!!」

彼女の名を叫びながら左腕の楯を刃に変え、俺は彼女に切りかけた。

しかし、いとも簡単にカウンターを食らい、あっさり勝敗は決した。俺の攻撃は刃が彼女の頬をかすめただけだった。

「ふうん…今の私に当てるなんて…。流石は…が…だけはあゝわね。」

彼女が何か呟くが強力な一撃を食らい、意識が朦朧としていた俺には聞くことが出来なかった。

「気が変わったわ。あなたとはまた向こうで遊んであげる。」

そう言うと彼女は地面に奇妙な空間を開いた。

「これは時空の穴よ。あなたにはこれで過去へ飛んでもらうわ。」

そう言いながら俺を持ち上げ、

「さあ…時間旅行へ行ってらっしゃい!」

俺をそこへ投げ込んだ。

そして…俺は時空の穴の中を墜ちていった。

穴が閉じる最後の瞬間に見えた光景は炎に包まれ崩壊する街の姿だった。

かくして、運命の扉は開いた。運命の荒波は彼を新たな出会いと戦いに導くことになる…。

第一話 開幕（後書き）

初めまして、作者です。

最初からグダグダで本当にすいません。

次回から原作と絡んでいきますので、よろしくお願いします。

人物、機体紹介（前書き）

人物、機体紹介

人物、機体紹介

人物

柊 優也 (ヒイラギ ユウヤ)

身長

172cm

体重

56kg

生年月日

2460年 8月23日 17歳

血液型

B型

主人公。幼少より機体の開発に関わり、独創的なアイデアと天才的な頭脳で数々の伝説を作る。

容姿は上の上で、かなりモテたが、凄まじく鈍感な上、乙女心を容易く粉碎するので、“乙女ブレイカー”の称号を持つ。

水瀬 春香 (ミナセ ハルカ)

身長

158cm

体重

43kg

スリーサイズ

B 88 W 53 H 89

生年月日

2459年 11月16日 18歳

血液型

O型

ヒロイン。流れるような黒髪、雪のように白い肌、抜群のスタイルと皆を明るくする性格の持ち主。

所持する機体は、最新鋭の技術で作られている。いきなり豹変し、優也を過去に飛ばしたが…？

機体

共通特性

基本的に、武装展開時の身体能力の向上と、各機体に固有の専用兵装がある。

非武装時に、変換デバイスに光を当てることで機体のエネルギーを回復させる。

優也機

全体的なイメージが　ンダム　0のエ　シアに近い。

左腕に多目的兵装、右手に銃が基本。

あらゆる機体の中で唯一戦闘AIを搭載している。

機体にプロテクトがかかっており、本来の実力をいまだ発揮出来ない。

春香機

優也機のカラーリングを金にし、マントを付け、右腕に爪状の籠手を付けた機体。

最新鋭の技術で作られており、性能は全機体トップ。

第二話 そこは大正時代（前書き）

第二話

そこは大正時代

第二話 そこは大正時代

永遠とも一瞬とも感じられる時空の中を俺は墜ち続けていた。

そして…

突如、光に包まれたかと思えば俺は空中を落下しており、結果、背中から地面に叩きつけられてしまっていた。

武装を解除し、周りを見渡すとそこには見覚えのない光景が広がっていた。

「…プロト、ここは何処？」

『座標確認…確認完了。現座標、東京、上野』

プロトに聞くと信じられない答えが返ってきた。

「…東京！？ここが？だってここはどこもかしこも機械化されてないよ？」

『…正確には過去の東京。』

そうだ…俺はアイツに過去に飛ばされたんだった。

思い出すと怒りと悔しさが込み上げる。だが…、

「今はここから移動しよう。何かこの時代の事が分かるかもしれない。」

『了解。』

ひとまず、情報を探る為、移動することにした。

暫く歩いていると、そこには沢山の桜の木と大勢の花見客がいた。

「桜か…。俺達の時代じゃ植物資料館にしか無かったな。」

『肯定。状況が状況でなければ、花見を嗜みたいものだ。』

時々プロトはこのような人間のような発言をするので少々困惑する。

…まあ花見の件は同感だけだ。

「それより今は情報を集めよう。…すみません、お聞きしたい事があるのですがよろしいですか？」

花見をしている男性に聞く。

「ああ。何だい？」

「実は僕…新聞記者見習いで、この花見を記事にしたいんですけど、今年が何年がど忘れしちゃって…教えて戴けませんか？」

正直に訳を話せないので、嘘について聞くことにした。

「兄ちゃん、若いのに大丈夫か？今年は何年か、大正十二年だよ。」

男性は若干怪訝そうな顔をしたが、教えてくれた。

「ああ！そうでした、大正十二年でした、どうも有り難うございま

す！」

男性に礼を言い、その場から離れる。

しかし、大正か…どうやら俺は500年以上過去に飛ばされたらしい。

だが、今俺が一番懸念している事態はそれでは無かった。

「…プロト。明日からの生活…どうしよう？」

そう…俺は過去に飛ばされたが、自分の持ち物は変換デバイス以外、何一つ手元に無かった。

寢床は野宿で何とかなるとしても、着替えや食料はどうにもならない。

『重大な危機。有効な対処法、無し。』

こればかりはどんな超人でも無理だ。

かぶりを振って顔を上げると、目の前に見覚えのある鞆が置いてあった。

「あれ？俺の鞆がある。…なんで？」

確かつい一瞬前は何も無かったのに。

鞆の上には差出人の名が書かれていない手紙があった。

開いて読むと内容はこんなことが書かれていた。

”今あなたに必要な物を託します。こんなことしか出来ないけど…
負けないで”

内容を確認し、鞆を開けると、中には着替えや食料、本来軍に編入してから渡されるはずの機体の拡張データカードなどが入っていた。

「拡張データ：ブースターと通信用のインカム、そして…機体性能
上昇プログラム、か…。」

今の俺には不要に見える。でも…

「手紙には必要な物とあった。拡張するよ、プロト。」
『了解。』

俺は腕の変換デバイスにカードを挿入し、機体性能を拡張した。

『…拡張完了。機体展開時の機体性能及び身体能力のさらなる向上
と武装追加枠の増加を確認。』

プロトが拡張終了を告げる。その直後、花見客達から悲鳴が上がっ
た。

そちらに視線を向けると花見客を全長3、4mはある複数の鎧の化
け物が襲っていた。

その中の一体の化け物は手に持った太刀を今にも振り下ろさんとし
ていた。

それを見た俺は考えるより先に体が動いていた。

武装を展開し、拡張され背肩部に増設されたブースターの出力を最大にして接近し、右手に持った銃で化け物の太刀を腕ごと吹き飛ばしていた。

「皆さん早く逃げてください！」

俺は花見客に大声で指示した。

「兄ちゃん、あんた、その姿…」

先ほど俺が質問した男性が呻く。

「俺がコイツ等を何とかします！皆さんは早く避難を！」

俺の指示が伝わったのか花見客は我先にと避難していった。

『敵数6機、囲まれると不利。』

「言われなくてもわかってる！」

俺は化け物達の死角に回り込みながら、左腕の刃と銃でその体を撃ち抜き、切り裂いた。

「ほう…なかなかやるではないか。」

少し離れた所にある鳥居の上で男が呟く。

「どうした？」「又丹」殿。」

隣の大男が男に尋ねる。

「あそこの小僧…「脇侍」をいとも容易く倒していく。少々厄介だ。」

「ならば、どうする？又丹殿？」

又丹と呼ばれた男は不敵に笑い、

「ここはあの女の力を使うとしよう。」

そう言つて優也が破壊した残骸に手を向けた。

『…敵機全撃破を確認。周囲の損害、無し。』

無事に化け物を全て破壊し、一息つく。

だがその時、

破壊したはずの化け物の残骸が目の前で一つに合体した。一つになった化け物は合体する前より一回り以上大きくなっていた。

「大きくなつたつて、死角に回り込めば！」

死角に回り込みながら銃を撃つ。だが、急に弾が出なくなった。

（玉詰まり！？…こんな時に！）

化け物は俺が攻撃しないのを好機と見て太刀で切りつけてきた。

楯から障壁を展開し太刀を受け止める。

『警告！エネルギー減少中！障壁消失まで残り1分！』

プロトが警告を告げる。

（このままじゃギリ貧だ…何かないのか！？）

俺は焦りと共に辺りを見渡した。

そして見つけた。

俺は化け物の太刀を弾き返し、

「それ」を手に取り、化け物に向かって振り下ろした。

一撃で化け物を両断し、今度こそ化け物は動かなくなった。

俺が取ったのは最初に腕ごと吹き飛ばした化け物の太刀だった。

『戦闘終了。エネルギー残量、10%以下。』

プロトが戦闘終了を告げた。

「…終わった…。」

俺はそう呟きその場へたり込んでしまった。

もうあの化け物は居ないかと思渡すと、

離れた所で化け物が暴れていた。

(戦いたくても、今の俺達は戦えない!…どうすればいいんだ!?)

戦闘で消耗し、余力の無い俺は見ていることしか出来なかった。化け物が屋台を壊そうとする。その時、

「そこまでよ!」

何処からか凜々しい声が響いた。

それと同時に見覚えのある機体が姿を表した。

(あれは【光武】!…と言うことは彼等は【帝国華撃団】か!)

【光武】達は見事な連携で次々に化け物を倒していった。

しかし、俺は彼等に一つの違和感を感じていた。

(…? 橙色の【光武】なんて存在しないはず…。まさか…)

「プロト!」

『肯定。歴史が改変されている。』

その事実、俺は凄まじい戦慄を覚えていた。

化け物は【光武】の活躍もあって、あっという間に全滅した。

「…あちらさんも終わったみたいだ。撤収しよう。」

『了解。』

武装を解除し、その場から俺は一旦離れた。

その後落ち着きを取り戻した人々は、また花見を楽しんでいた。

『…変換完了。次回武装展開時より、自身の拡張武装として使用可能。』

「分かった。」

あの後、奪った太刀はプロトに頼んで拡張武装にもらった。

俺は桜の木に寄りかかり、楽しむ人々を見ながら、様々な事を考えていた。

(歴史が改変される…。奴の仕業、か?)

俺をここに飛ばした張本人、「水瀬 春香」、いや、「フレイヤ」が何か絡んでいる、そんな気がした。

ちなみに、フレイヤは彼女の軍事学校時代の異名のだ。

(…奴は歴史を変えて何がしたい? 目的は何だ?)

考えても分からない。だが、…

「…プロト。俺達で奴の企みを潰していくよ。」

奴が何を考えようと全て潰せば問題無い。後は、この時代に極力関

わらないようにすればいい。

『肯定。だが…』

「そうだな。今は、少しだけ夜桜を楽しみますか！」

俺は、この時代を守る、そう決意し、束の間の休息を楽しむのだった。

第二話 そこは大正時代（後書き）

どうも、作者です。

第二話ですが、作者が未熟者で、原作ファンや読者の皆様は大変不愉快な思いをしたかと思えます。もっと努力していきますので、どうかお付き合いください。

さて、次回は少々長くなるので前後編でいこうと思えますので、よろしく願います。

第三話 激突！帝国華撃団！ 前編（前書き）

第三話

激突！帝国華撃団！前編

第三話 激突！帝国華撃団！ 前編

前回の戦闘から一月が経った。だがしかし、「フレイヤ」やあの化け物達に動きは一切無かった。

俺達は可能な限り情報を集めたが、様として「フレイヤ」の目的や化け物達の正体は掴めなかった。

『食料の残りが殆ど無い。このままでは、一日二日で枯渴する。』
加えて、鞆にあった食料はほぼ底をついていた。

「このままじゃちがあかない。プロト、街に出よう。」
『確認、人の多い所は好ましくないと断っていたが？』

プロトが聞いてくる。

確かに、この時代の人とあまり接触しないほうがいい。でも…

「隠れていたらこれ以上情報は集まらない。…行くっ。」
『了解。』

俺達は情報を得るため、街へ足を運ぶのであった。

街は人々で溢れ、活気で賑わっていた。

俺が街に出なかったのには理由があった。

それは、前回の大き立ち回りがいつの間にか写真に撮られていて、新聞に「白騎士降臨！」の見出しで世間に出回っていたからだ。

確率は低いけど、万が一俺が白騎士だと気付かれたら、自由に動けない。

そんな理由で、俺は世間から隠れるような一月を過ごしていた。

「…まあ、一月も前の事だし、気づかれる筈は…」

「現れたな、白騎士！」

…馬鹿な！？もうバレただと！？

その事実には愕然としながら、声の方を向く。

そこでは、子どもたちがごっこ遊びをして遊んでいた。

(なんだ、ごっこ遊びか…。…寿命が縮まるかと思った。)

一瞬、本当にバレたかと思いき、焦ってしまった。

『街に出た。どうする？』

プロトが聞いてくる。

「とりあえず、【帝国華撃団】を探ろうと思ってる。」
『何故？』

「あの化け物の事は彼等が知ってる…。そんな気がする。」

『確認、場所は分かるのか？』

「…今から人に尋ねる。」

一番重要な部分を指摘され、少々悔しい。

「すみません、【帝国華撃団】って、何処にありますか？」

道行く女性に尋ねる。

「ああ、【帝国華撃団】？知ってるわよ。案内してあげる。」

女性は親切に案内までしてくれた。

「ここがそつ。」

俺の目の前には立派な建物があった。

なる程、確かに“かけきだん”だ。

但し、その文字は“歌劇団”だったが。

「あの、ここ以外に“かけきだん”は？」

「無いわ。」

女性は無慈悲な一言を告げる。

(な…何いいいい！?)

顔には出さないが、俺は内心、とても驚いていた。

「それはそうと、あなた、どうして【帝国歌劇団】に來たいと思ったの？」

女性が尋ねてきた。

「え？あ、それはですね、」

とっさに理由が浮かばない。

「実はつい先日この帝都に來たばかりで…、噂の【帝国歌劇団】を一目見たいと思ったんです。」

帝都には一月前からいるが。

「じゃあ劇も観ていくの？」

「残念ながら手持ちがなくて…。」

そもそもこの時代の通貨を持ってない。

「なら丁度良かった！」

「？」

「実は私、今日の劇の切符を持っているのだけど、急用が出來て観れなくなつたの。あなたにあげるわ。」

「え？いや、いいですよそんな…」

「いいから。」

そう言うと女性は俺に切符を押し付け、足早に去って行つた。

「…ハア。仕方ない。お言葉に甘えて観ていこう、プロト。」

『了解。』

本当は観ている場合じゃ無いが。

劇場に入り、客の列に並ぶ。

そうしているうちに俺の順番が回ってきた。

「いらっしやいませ。帝国劇場にようこそ。」

モギリの青年が差し出した切符を切りながら言う。

開演まで少し時間が有るらしく、俺は劇場内を見渡していた。

すると、背後から、子供の泣き声が聞こえてきた。

「我が儘言わないの。ほら、帰るわよ。」

「嫌だ！劇を観るの！」

見ると、母親と男の子が言い争っていた。

俺はそちらに足を向け、男の子に質問していた。

「どうした？少年、なにが悲しい？」

男の子は声をかけられた事に驚きながらも話してくれた。

「僕…今日誕生日で…お祝いについて、ここの劇を観に来たけど…切符を無くしちゃったの。」

男の子はしゃくりあげながら答えてくれた。

「そうか…、じゃあきつと、この切符は少年のだ。」

俺は自分の切符を男の子に手渡した。

「本当!？」

「ああ、本当だとも。」

男の子は泣き顔から一変、笑顔になり俺の切符を受け取った。

「いいんですか？」

母親が尋ねてくる。

「いいですよ。俺、劇を観てると必ず寝ちゃいますから。」

「兄ちゃんは観ないの?」

男の子が訊いてくる。

「うん。もう席も無いだろうし。」

たとえ空席だろうと切符の無い俺は観れない。

「一緒に観ようよ!」

男の子が誘う。

「そうはいつでも…」

「どうかしましたか？」

仕事が終わったのか、モギリの青年がこちらに来ていた。

「いや、この子と一緒に劇を観よう、と言われたはいいんですが、俺、生憎手持ちが無くて…。」

「それなら…」

「昨日の劇は斬新だったね、プロト。」

『肯定。他に類をみない劇だった。』

翌日、あの後一緒に劇を観た親子の厚意で家に泊めていただき、今俺達は街外れを歩いていた。

青年が、俺を特別にタダで二階の立ち見席に入れてくれたお陰で、俺も劇を観ることができた。

結果だけ言うと…劇は大失敗だった。

いや、途中までは良かった。男装の麗人の迫真の演技や、花売りの少女を演じた少女の、少したどたどしいが目を離せない演技は見所十分だった。

しかし、クライマックスで少女が転けてしまい、セットが壊れてしまった。

その後は出演者同士の言い争いになってしまった。

「劇は良いとして…、さて、どうしたものか。」
途方に暮れていると、耳に付けていたインカムのイヤホンから声が聞こえてきた。

どうやらインカムの周波数が偶然合っていたらしい。

声はこんなことを言っていた。

「芝公園に【魔操機兵】出現！【帝国華撃団】はただちに出撃してください！」

声から察するに、やはり、【帝国華撃団】は実在し、あの化け物は魔操機兵と言っらしい。

『情報は得た。如何する？』

プロトが聞いてくる。

確かに、ここでまた介入すれば歴史が変わるかも知れない。

だが、俺の心は昨日、男の子の笑顔を見た時、既に決まっていた。

歴史が変わるなら、正しい歴史に導くのみ！

「了解。ただちに現場に急行する。」

「え！？あなた、誰なの！？」

マイクで返事をする、うるたえた声が返ってきた。

「俺か？俺は…」

この時代の異名を名乗る。

「【白騎士】、だ！」

相手が何やら言うが、全て無視し、俺は武装を展開する。

そして、拡張した際に追加された、空間転移のための機能を稼働させる。

「レール射出！」

脚部から光のレールを射出する。

リニアモーターカーの線路と同じ原理で出来たレールは、俺が通過するに十分な広さを取って、空中に静止する。

『レール射出完了。転移用ワームホール、出力安定。』

俺の目の前のレールの先に漆黒の空間が展開する。

「行くよ！」

ブースターとレールで加速し、漆黒の空間に飛び込む。

レールと空間が消えた後、そこには何も残っていなかった。

東京 芝公園

「オンキリキリバサラウンバツタ、オンキリキリ……」

芝公園では、奇妙な老人が、呪文のようなものを唱え、楔状の物を埋めていた。

その時、

突如眼下に光のレールと漆黒の空間が現れ、レールの進路上にいた魔操機兵が両断された。

「!?!? 何者だ!?!?」

老人が呻く。

「【白騎士】 参上! もう好きにはさせない!」

老人に名乗る。

「くくく…貴様が又丹が言っていた小僧か。」

老人が笑う。

「今は貴様とは遊ばん。小奴らと戦うがいい。」

そう言つて老人は消えてしまった。

魔操機兵が動き出す。

「プロト！ここで時間を稼ぐ！フォローを頼む！」
『了解！』

俺達は時間を稼ぐ為、防御に徹する。

時間を稼げば、必ず彼等が…！

そして…

「そこまでよ！」

凜々しい声が響く。

予想通り、【帝国華撃団】が来てくれた。

(一機増えてる…新しい団員、か。)

【帝国華撃団】には、新しく緑色の【光武】が増えていた。

彼等はそれぞれ、白、桃、橙、紫の【光武】が手に持った、太刀、大剣、長刀で魔操機兵を切り裂き、黒、緑の【光武】が火器で援護する。

魔操機兵は瞬く間に破壊されていった。

「俺達も行くよ！プロト！」

『了解…！』

「どうした？」

『武装データ更新。兵装追加を確認。』

どうやら、機体のプロテクトが一部解除されたらしい。

「それなら、あいつで試す！」

攻撃に耐きれず現れた白い魔操機兵に接近し、

肩、肘、腰から次々に一対の剣を引き抜き、突き刺す。

計六本の剣を突き刺し、左腕の武装から光の刃を出現させる。

「受ける、新技！七刃抜刀！」

そう言い放ち、光刃を振り下ろす。

白い魔操機兵が両断されると同時に、【帝国華撃団】が最後の一体を破壊した。

「戦闘終了。直ちに撤収する。」

戦闘終了を確認し、撤収しようとする。

だが、その進路を【光武】が阻んだ。

「【白騎士】、俺達と一緒にきてもらいたい。」

隊長機と見られる白い【光武】が告げる。

「…嫌だ、と言ったら？どうする？」

「君に手荒な真似はしたくない…。だが、君を逃がす訳にはいかない！何としてもきてもらおう！」

【光武】が俺の周りを囲むように動く。

「力ずくかよ…。上等。」

戦う理由は全く無いが…

「喧嘩を売られた、それで理由は十分だ！」

第三話 激突！帝国華撃団！ 後編（前書き）

第三話

激突！帝国華撃団！ 後編

第三話 激突！帝国華撃団！ 後編

（本当にこれでいいのだろうか…）

【帝国華撃団】、【花組】隊長、「大神 一郎」は苦悩していた。

目の前に居る【白騎士】、つまり、優也を力ずくで捕獲することが、どうしても納得いかなかった。

出撃前、司令室

「俺か？俺は…、白騎士だ！」

こちらの回線に突如としてハッキングし、白騎士が告げてきた。

「大神…。奴は、今は我々の敵と戦っているが、全て撃破すれば我々を襲うかもしれん。それだけは避けなければならん。」

【帝国華撃団】長官、

「米田 一期」が重々しく告げる。

「しかし、彼は只人々を守りたいだけなのでは？」

大神は思ったことを正直に告げる。

「あるいは、そうかも知れん。だが、それなら尚更奴の行動が読めん。」

「何か理由が有るのかもしれません。」

この時、大神はある決意をしていた。

「長官、我々で彼をここに連れてきたいと思います。」

「正気が大神!？」

「はい。彼から事情を聞き、可能ならば協力してもらいたいと思います。」

「他の皆もいいかな？」

大神は【花組】団員に問いかける。

「私は賛成です。」

「真宮寺 さくら」が賛同する。

「お兄ちゃんがそうしたいなら、アイリス、いいと思う!」

団員最年少の「アイリス」も賛同する。

「ええと思いまっせ。」

「お好きになさいます。」 「相手の動きに気をつければ、可能です。」

「李 紅蘭」、「神崎スミレ」、「マリア・タチバナ」も賛成してくれた。

そして、

「それが、大神どのの願いなら、私も賛成します。」

最後に「彼女」も賛成してくれた。

「よし、白騎士をここに連れてくる！【帝国華撃団】出撃せよ！目標、芝公園！」

「了解！」「」

そして、大神の苦悩など知らず、優也は告げる。

「喧嘩を売られた、それで理由は十分だ！」

「少尉！来ます！」

マリアが告げる。

「やむを得ない、彼を動けなくする！各機、挟み込むように戦うんだ！」

「了解！」「」

こうして戦いの火蓋が切って落とされた。

「喧嘩を売られた、それで理由は十分だ！」

と、俺、「柊 優也」は威勢良く啖呵を切ったはいいものの、

(プロト、エネルギー残量はどれくらいある?)

(残量45%。長時間の戦闘は不利。)

あまり状況は芳しくなかった。

(それでも、やるしかない!)

俺は白い【光武】に突撃した。

しかし、黒い【光武】の放った銃弾に阻まれ、攻撃することは出来なかった。

その後は、俺が一方的に攻め立てられるだけだった。

【光武】達は、巧みに俺を挟み込み、反撃の糸口を掴ませなかった。

(強い!今までの敵は自分勝手に戦ってたけど、彼等は強さの次元が違う!)

見事な連携に舌を巻く。

『脚部に被弾!戦闘効率低下!』

さらに、状況は悪化していく。

(ここで捕まったら、誰も「フレイヤ」を止められなくなる!捕まるわけには...)

しかし、無情にも徐々に追い詰められる。

「危害は加えない。俺達に話を聞かせてほしいんだ。」

隊長機が告げる。

(逃げようにも、出力が上がらない!…ここまでか。)

俺が諦めかけた、その時、

『…!「セーフティデバイス、キャンセルシヨン」』

「プロト?」

『「エンジェル・ハイロウ起動。最終戦闘モード、発動。」』

プロトが言い終わると同時に、機体の背部から光の翼が出現し、全身が発光し始めた。

(「エンジェル・ハイロウ」が起動した!?今まで一度も起動しなかったのに!)

理由は解らない。だが、

「これなら行ける!」

俺は再び【光武】に突撃するのだった。

「【村正】!」

右手に村正と銘打った太刀を展開し、左腕から光刃を出力し、白い【光武】に切りかかる。

俺の怒涛の攻めにたまらず【光武】が守りを固める。

「これで終わりだ！七刃抜刀！」

守りを固める【光武】の武器に向かって六本の剣を突き刺す。

遂に【光武】のガードが崩れた。

（もらった！）

俺は光刃を振り下ろした。

しかし、【光武】に当たる直前、光刃が消えてしまった。

同時に翼と全身の発光も消える。

「プロト？」

『エネルギー残量0。戦闘不能。』

エネルギー切れ…

さいですか。

その後、俺達は【帝国華撃団】に捕獲され、目隠しをさせられ、い
ずこかへ移動していた。

「機密保持の為とは言え、君に目隠しをさせて済まないと思ってる。」

隊長さんが謝罪してくる。

…どこかで聞いた声だな。

「いいさ。俺もあんだの立場ならこうする。…ところで、俺はどこに連れてかれてるの?」

目隠しされててなにも見えない。

「俺達【帝国華撃団】の司令部だ。君にはそこで俺達に事情を話して貰いたい。」

「考えとくよ。」

絶対話さないが。

話している内に到着したらしい。

俺は目隠しをしたまま歩かされる羽目になった。

「【帝国華撃団】にようこそ、白騎士君。俺は…」

「待った、【帝国華撃団】の皆さんの正体、当ててみせるよ。」

予想が正しければ、きっと…

「昨日、新感覚の劇を見せてくれた、【帝国歌劇団】の人たち、でしよ?」

息をのむ雰囲気が伝わる。どうやら正解のようだ。

「どうして解ったんだ?」

隊長さんが尋ねてくる。

「答えは簡単。声を覚えていたから、だよ?モギリのお兄さん?」

最初は解らなかったが。

「ならば早い。聞かせてくれないか？君の事情を。」

隊長さんが急かす。

だが、俺はしらばっくれた。

「話すことなんかないね。」

「少尉、ここは私が。」

「分かった。マリア。」

マリアと呼ばれた団員が、俺の目の前に立つ気配がする。

ふふん、俺が真面目に話すと思うなよ！

「正直に話なさい、でなければ撃つわ。」

「いいだろう。」

これは、急に真面目に答えたくなったからだ。決して、撃たれるのが怖かった訳ではない。

俺は話した。俺が未来の人間で、この時代に飛ばされたこと、自分の機体のこと、歴史が自分の知っているものから変わっていることを。

「途方も無い話だな……」

隊長さんの困惑した声が聞こえる。

それはそうと、早く目隠しを取ってほしい。

「でも、君が嘘を言ってるとは思えない。信じるよ。」

目隠しを取りながら隊長さんが告げる。

分かって貰えてなりよりだ。

自由になった視界で周りを見渡す。

うん、昨日の皆さんだ。

だが、俺はその中に、よく見知った顔を見つけていた。

(…水瀬さん！？いや、違うな。ご先祖様、か？)

「彼女」は水瀬さんによく似ていた。

黒い髪、白い肌、雰囲気、そっくりだった。

だが決定的に違う部分があった。

自分の知っている彼女のそれは、服の上からでも確認出来るほど立派に自己主張していた。

だが、目の前の彼女のそこは、絶望的に一直線だった。

「…まな板…」

「な！ななな、何だと、貴様！私が一番気にしてることをよくも！」
！？しまった！つい、本音が！

「申し訳無い、失言だった。改めて自己紹介させていただく。柊優也です。未来から来ました。」

「俺は大神一郎。優也君、君はこれからどうするんだ？」

「優也でいいよ、大将。俺は、これから必ず「フレイヤ」を見つけ出して、歴史を変えた報いを受けさせる。」

それが俺に出来る唯一のこの時代に対するケジメだからだ。

「そうか…。優也、よかつたら、【帝国華撃団】に入らないか？」

大神は予想外の一言を告げる。

（俺が【帝国華撃団】に？それは…）

「申し訳無いが断らせてくれ。」

「しかし！」

「最後まで聞いてよ、大将。今俺が【帝国華撃団】に入ったら、また歴史が変わる…。それだけは避けたい。」

「優也…」

「でも、許してくれるなら、一緒に戦います。…協力者として。」

俺は本心を伝えた。たとえ、理解されなくても、後悔しない。

「今はそれで十分だ。よろしく、優也。」

「よろしく願います、柊さん。」

「よろしくね！」

「よろしゅう頼みます！」

「足を引つ張らないようにしていただきたいですわね。」

「あなたの戦闘能力、期待するわ。」

【帝国華撃団】の皆さんは許してくれた。なんていい人達なんだ！

「ほら、ともしえ巴君も！」

大神が先ほどのまな板少女を呼ぶ。

「…水瀬 巴だ。私は、先ほどの恨みを忘れないからな！」

巴、と呼ばれた少女に睨みつけられる。

「…根に持たれてしまった。」

『自業自得。』

プロトにキツイ一言を頂く。

「じゃあ、部屋に案内するよ。」

大神が俺を部屋に案内する。

「俺と相部屋で済まないが…」

そこは大神の部屋だった。

「いいよ、野宿より百倍ました。」

屋根が在るだけ特に。

「そうか……。じゃあ、改めて明日からよろしく、優也！」
「ああ、よろしく。」

こうして、【帝国華撃団】に協力する事になった俺は、ベッドを大神に譲り、部屋の隅に座って眠りにつくのであった。

同時刻、某所

「ふふつ。そろそろ私も動こうかしら。」

「貴様も動くか。【天海】様の邪魔はするなよ。」

「分かってるわ。」

「次はこの【蒼き刹那】が貴様等を全員八つ裂きにしてやる。見て
いるがいい、【帝国華撃団】！」

かくして、各々の思惑を乗せて物語は動き出す。この物語のいくす
えは、まだ、誰も知らない……。

第三話 激突！帝国華撃団！ 後編（後書き）

最初に謝罪させていただきます。申し訳ありません。

原作と絡めるとか言って、後編になってやっと、絡んで来ました。遅くなって本当に申し訳ありません。

さて、如何でしたでしょうか？ガンム0のブレードを使用した駄文を読んでも頂いた皆様には、感謝してもしきれません。

それでは、また次回、お付き合いください。

人物、機体紹介2（前書き）

人物、機体紹介2

人物、機体紹介2

はじめに

帝国華撃団の皆様は、公式設定に準じますので、割愛します。ご容赦下さい。

人物

水瀬 巴
ミナモト
トモエ

生年月日

1907年 2月18日 16歳

スリーサイズ

B70 W53 H87

血液型

O型

オリジナルキャラ。歌劇団に一番最近入った為、戦闘、演技共にまだまだ未熟な面が多い。自分の体型を気にしていて、特に、胸の話は嫌がる。

機体

巴機

カラーリングは橙。大剣を装備し、圧倒的な攻撃力で敵を両断する。
必殺技は「天下無双剣」。

第四話 新たな力と動き出す悪意（前書き）

第四話

新たな力と動き出す悪意

第四話 新たな力と動き出す悪意

【帝国華撃団】に協力することになった俺は、平時は、大神の雑用の手伝いをする事になった。

大神は、団員が全員女性なので気遣いに苦労すると先日、俺に愚痴をこぼしていた。

…隊長も大変だ。

今俺は、雑用が一段落し、食堂で休憩していた。

すると、見覚えの無い女性が食堂に入ってきた。

「オメエが新入りか。あたいは「桐島 カンナ」、よろしくな！」

女性はそう名乗り、

「あたかも【帝国華撃団】の一員なんだ。オメエの力、見せてもらうぜ。」

などと言ってきた。

「よろしく、あ、俺は…」

「なあ、あたかも飯くっていいか？」

カンナは椅子に座りながら聞いてきた。

…俺も名乗らせてくれ。

そして、出てきた大量の料理を凄い勢いで食べ始めた。

俺が唾然として見ていると、

「オメエの名前、優也って言うんだろ？隊長からさっき聞いたんだ。」

「

と言ってきた。

知ってたなら先に言って欲しい。

「あー、食った食った。ごちそーさん。」

もう食べ終わったらしい。…速いな。

呆れていると、突如、築地に魔操機兵出現した、と報告が入ってきた。

「行こうぜ、優也！」

「勿論！」

俺とカンナは急いで指令室に向かうのであった。

東京、築地

「オンキリキリバサラウンバッタ、オンキリキリ…」

築地では、どうみても少年のような男が、先日の老人のように、呪文を唱え、楔を埋めていた。

そして、

「そこまでよ！」

馴染みの台詞と共に、【光武】と、武装を展開した俺が現れた。

【光武】と俺の連携もあって、あっという間に敵は男一人になった。

「あとはお前だけだ！」

大神が告げる。

男は不敵に笑い、

「これを見ても、そう言えるかな？」

と、地面から蒼い大型の機体を出現させ、搭乗した。

すると、

「！？大将！まずい！」

「どうした！？優也！」

「あそこに子供が逃げ遅れてる！」

今まで見えなかったが、倉庫の影で、子供が震えていた。

蒼い機体も子供を見つけ、手の爪を子供に向かって振り下ろしてい

た。

間一髪で大神が爪を受けとめ、子供を逃がす。

「大将、援護する！」

援護のため、大神に近付こうとする、

だが、

「残念だけど、あなたを行かせるわけにはいかないの。」

突如現れた「フレイヤ」に進路を塞がれる。

そして、

「ぐはっ！」

大神の【光武】に蒼い機体が強烈な一撃をお見舞いした。

「じゃあね。」

フレイヤと蒼い機体はいずこかへ撤退してしまった。

「大神さん、しっかりしてくださいー！」

さくらの悲痛な声が響く。

（やられた…）

奴らの一手に、俺は目の前が真っ暗になった錯覚を覚えた。

数日後、大神は意識を取り戻した。

とは言え、まだ俺はさくら達から聞いただけで、直接確認はしていない。

…後でちゃんと見舞いにいこう。

暫く経って、雑用も一息ついたので、見舞いに行く事にする。

「柊君？今から大神君のお見舞い？」

「あやめさん…」

俺に声をかけてきた女性は「藤枝 あやめ」。

華撃団の副指令で、歌劇団の副支配人でもある。

「私も御一緒に良いかしら？」

「構いません。一緒に行きましょう。」

あやめと並んで大神の元へ向かう。

「大将、入るよ。」

「ああ。入ってくれ。」

俺達は部屋に入った。

「久しぶり、大将。」

「ああ…。」「?どうした?」

大神は深刻そうな表情をしていた。

「大神君、どうしたの?」

「あやめさん…俺、マリアが心配なんです。」

大神は話してくれた。マリアに自分は隊長失格だと告げられたこと、何か隠していて、それが心配な事を。

「済まない、大将。俺がもっと速く援護していれば…」

「優也のせいじゃないさ。それに、俺はあの子を護ったことを後悔していない。」

大神はキツパリと言って見せた。

「そう言えば、そのマリアさんは何処?」

俺は今日一度も彼女に会ってない。

首をひねると同時に、

「隊長、大変だ!マリアが一人で【光武】に乗って出て行っちゃまった!」

カンナがやって来て、衝撃の一言をくれた。

「大将!」

「ああ!行こう!」

俺達はマリアを追うため、急いで出撃するのであった。

マリアの【光武】の反応を追い、着いた所は築地だった。

光武を確認するとマリアは乗っておらず、もぬけの殻だった。

辺りを見渡す。

すると、

「よくきたな、帝国華撃団！」

前回大神に一撃をくれたあの男の声が何処からか言い放ってきた。

「あの女を返してほしくば、大神一郎、貴様一人で来るのだ！」

そう言っつて、声は聞こえなくなってしまった。

「畏だぜ、大将。」

「分かってる、でも、マリアは奴らに捕まっているんだ！…俺は行く。」

そう言っつて、大神は光武から降りて行ってしまった。

「どつすねば…。」

「ウチに任せとき、柊はん！」

紅欄が自信ありげに言う。

「今から反撃開始や！」

一人でマリア救出に向かった大神は刹那に痛めつけられ、危機に陥っていた。

「これで終わりだ！大神一郎！」

刹那が爪を振り上げる。

「少尉いいー！」

マリアが悲痛な叫びをあげる。

その時、

いきなり壁が吹き飛び、【帝国華撃団】が姿を表した。

「馬鹿な、どうやってここがわかった!？」

刹那がうるたえる。

「【花組】の団員の襟には発信機が付いとんのや！甘くみたらあかんで！」

紅欄が言い放つ。

「くっ、だが貴様等如きが勝てると思うなよ！出でよ【蒼角】！」

刹那はその蒼い機体呼び出した。

「大将、マリアさん！早く光武に！」

「ああ！」

「分かってるわ！」

大神とマリアが光武に搭乗する。

さあ、仕切り直しだ！

「この【蒼角】の速度に追いつけるものか！」

言うだけあって、奴の速度は異常だった。

超高速で死角に回り込み、強烈な一撃を放ってくる！

「なら、プロト！」

『了解。特殊弾装填。』

銃を展開し、装填する弾を変えて、奴が現れた瞬間、撃ち込んだ。

直撃した弾は、非常に粘着性の高い粘液を発し、奴の機動性を奪った。

「貴様！」

刹那がうるたえる。

俺は左手に持った村正で奴の装甲を切り裂き、

「マリアさん！」

トドメをマリアに任せた。

「スネグーラチカ”！！」

マリアの必殺技が、切り裂いた装甲の中に叩き込まれた。

「馬鹿な…この【蒼き刹那】が…」

全て言い終わる前に機体は爆発し、戦いは終わった。

「少尉…いえ、隊長、助けていただき、有難うございます。」

マリアは大神に感謝を述べていた。

「マリアさん、大神さん、「アレ」、やりましょうよ！」

さくらが二人を呼ぶ。

「よし、じゃあ…『勝利のポーズ！決めっ！』」大神達は思い思いのポーズを決めていた。

俺はそれを少し離れた所で見つめながら、別の事を考えていた。

(フレイヤは何故来なかった？俺を惑わせる作戦、か？)

やはり、考えても何も解らなかった。

（まあ、今は自分に出来ることをしますか！）

俺は『勝利のポーズ』を終えた大神達の元に向かうのであった。

第四話 新たな力と動き出す悪意（後書き）

作者です。この作品に誤字が有ったので報告します。

まず、ご指摘頂いた、

「太正」。本気で間違えてました。申し訳ありません。

後、「司令室」ではなく、「指令室」でした。本当にごめんなさい。

また誤字をやらかすと思いますが、ご容赦ください。

次回は、オリジナルの話をしようかと思えますので、よろしく願います。

第五話 新たなる脅威（前書き）

第五話

新たなる脅威

第五話 新たなる脅威

事は一通の手紙から始まった。

築地での戦いから半月ほど経ったある日のこと、

「優也、君に手紙が届いてた、渡しておく。」

大神が俺に手紙を渡してきた。

「ありがとう。大将。」

手紙を受け取って、内容を確認する。

そこには、

” 貴様と今こそ決着をつける。上野公園で待つ！
貴様の永遠の好敵手、黒騎士より ”

と、書いてあった。

「誰からだい？」

大神が訪ねてくる。

「…大将。今すぐ指令室に皆さんを集合させてほしい。」
「?どうしたんだ、優也？」

大神が怪訝そうな顔をする。

「…指令室で話す。」

「優也がそう言うのなら…分かった。」

大神は皆の所へ向かった。

『まさか奴まで来ているとは。…予想外。』

「厄介な奴だよ。本当。」

若干頭が痛くなるのを抑え、指令室に向かった。

指令室

「優也、聞かせてくれ。手紙に何が書いてあったんだ？」

大神が催促してくる。

「今から話します。…プロト。」

『了解。』

プロトに映像記録を出してもらい、話し始める。

「手紙の出し主は『黒騎士』。俺の時代の人間だ。」

「待て、その黒騎士に時代を超える力は無いのだろうか？何故この時代に居るのだ？」

巴が至極もつともな質問をしてくる。

だが俺は目星をつけていた。

「大方、フレイヤが奴をそそのかして連れてきたんだろう。」
時代を超えられるのは奴だけだ。それしか考えられない。

「しかし、この映像を見る限り、戦闘能力は高いようだな。」

大神が記録にある俺との模擬戦闘の映像を見て、言う。

「確かに、戦闘能力は俺を凌駕してる。しかし……」

奴には致命的な弱点があった。

それは、

「少々、目立ちたがりなんだ。」

映像でも、いちいちカメラ目線で行動するため、後ろから俺にはっ倒されていた。

「なる程、確かに強いわね。…頭は悪そうだけど。」

「かなりの実力者だな。…馬鹿っぽいが。」

マリアさんに巴、あまり馬鹿だの何だの言ってやらないでほしい。
奴はいつでも真面目だ。

「…で？あなたはこれのお馬鹿さんをどうするおつもり？」

スマイレに至っては既に馬鹿扱い。…ヒデエ。

「…説得します。」

「出来るんですか？」

さくらが訊いてくる。

「奴は単純だから、利害が一致するよう説得すれば簡単だと思う。」

「ならば大神達は後詰めとして待機させる。…頼むぞ。」

米田の許可も出て、俺は黒騎士説得の為、上野公園に向かった。

上野公園

人払いの術が施され、人気のない上野公園では、金髪碧眼の男が優也が来るのを待ちわびていた。

男は漆黒の装甲に身を包み、右腕にフレイヤと同じ爪状の籠手を装備していた。

「…来たか。我が至高の宿敵よ！」

男が言うと同時に武装した優也が転移してきた。

「久しぶり、”クロノア”。相変わらず、”わふー、わふー”言ったり、ハンバーグが大好きなのか？」

少々軽口を叩く。

「貴様！また私を馬鹿にしたな！」

「なら、名前で呼ぶ？嫌がってたよね？」

「それだけは止める！」

黒騎士の本名は”虎次郎・クロノア”。

親の感性が非常に気になる。

「…まあいい。今こそ貴様と、雌雄を決しようぞ！」

クロノアが高らかに告げる。

「それなんだけど…今は止めないか？」

「何だと？」

「お前とは必ず決着はつける…だが、この時代では駄目だ。…分かるだろう？」

今俺達が戦えば歴史に確実に影響を与える。

それは絶対に避けなければならなかった。

「なるほど、分かった。貴様のその言葉…信じていいのかな？」

クロノアが尋ねてきた。

「ああ、必ず。」

「ならば、ここは退く。…また会おう。」

クロノアはそう言い残し、転移していった。

「俺達も帰還しよう、プロト。」
『了解。』

きびすを返し、帰還しようとする。

すると、上空から歌声と凄まじい衝撃が俺の体中を襲った。

(…っ！これは『福音』！？一体誰が使っているんだ！？)

「全く。黒騎士も使えないわね。」

聞き覚えのある声。

「…フレイヤ！どうしてお前が『福音』を使える！？」

お前の機体に、その武装は搭載されていない筈！

「どうだっていいじゃない。…じゃあね。」

そう言い捨て、置き土産にもう一度『福音』を放ち、消えた。

「くっ…、プロト！」

『反応ロスト。追跡不能。』

(一体どうなってる…！？何故アレをあいつは扱えるんだ？)

何も分からぬまま、俺は苦々しい思いでフレイヤが消えた方を睨み続けることしか出来なかった。

夜

「優也、お疲れ様。」

大神が労いの言葉をくれる。

「大将…。」

「報告は聞いた。優也、彼女のこと、俺に話してくれないか？」

「ああ。この際だ、全てぶっちゃけるよ。」

前は話さなかった、「彼女」、つまり春香との関係など、俺は全て話した。

「そうか…ありがとう優也、話してくれて。」

大神は俺にそう言った。

「優也、これから何かあったら、必ず俺達に相談してくれ。俺達は…仲間だろっ？」

どうやら知らず知らずのうちに協力者から仲間になっていたらしい。

「…分かった。何かあったらみんなに相談するよ、大将。」

まだ解らないことは多い。

でも、

俺を仲間だと言ってくれる人達がいる、それが今の俺にはとても心強かった。

第五話 新たなる脅威（後書き）

誤字が多く、ご迷惑をおかけして申し訳ございません。

今回はオリジナルの話になりましたが、次回からまた、原作の話に戻ります。

またよろしければお付き合いください。

人物、機体紹介3（前書き）

人物、機体紹介3

人物、機体紹介3

人物

虎次郎・クロノア（とらじろう）

生年月日

2460年 5月 16日 18歳

血液型

A B型

通称、黒騎士。ルックスは最高なのに、若干のナルシストと言動で評価を下げる残念な人。

優也を（一方的に）ライバル視している。

機体

クロノア機

基本的に優也機と同型で、違いは装甲の色と武装。

クロノア機は右腕に爪状の籠手、通称【収穫者】を装備し、エネルギー系の攻撃を無力化することが可能。

フレイヤ機、武装

福音

声と同時に発生する衝撃波で相手を攻撃する。
いかなるバリアや障壁もすり抜けるので、防御不能。

本来、フレイヤ機に搭載されていない。

第六話 デートの尾行と新戦力（前書き）

第六話

デートの尾行と新戦力

第六話 デートの尾行と新戦力

先日の一件で、俺はフレイヤとの実力差を痛感した。

だから、今俺は地下であるものをいじっていた。

「あれ？柎はん、何してはりますん？」

地下にやって来た紅蘭が尋ねてきた。

「ああ、今、この【ブラックスミス】を修理しようとしたところだよ。」

いじっていた【ブラックスミス】と呼んだ某勇 王が使うような鉄槌を見せる。

ブラックスミスは元々、敵を高熱で融解させる灼熱槌だ。

だが、いつからか、壊れて使えなくなっていた。

「これ、どうしはりますのん？」

「うん。修理して、使えるようにしようと思ってる。」

「ふーん。なあ、ウチにも手伝わせてくれん？」

紅蘭が言ってきた。

「それは有り難いけど…、いいの？」

「そんなおもしろそうなもん、当たり前やん！」

理由は何にせよ、手伝ってくれるのは有り難い。

「じゃあ、お願い…」

「優也、ここにいたか！私に協力してくれ！」

紅蘭に協力をお願いしようとした瞬間、巴がやって来て言い放った。

「…イヤ、俺、コレ、修理、スルカラ。」

思わずカタコトになってしまふ。

「そんなこと後にしろ！…緊急事態なんだ。」

巴が深刻そうに言う。

「ええで、柊はん。ウチがやっつくさかい。」

「え？あの…、紅蘭さん？」

紅蘭は、俺の背中を押しながら、

「ウチ、コレ見て、ええアイデアが浮かんだんや。ウチに任せとき
」！

そう言って、追い出してしまった。

「…で？緊急事態って？」

「うむ。大神殿が…」

「むう、仲よさげな雰囲気、…何をしている、優也！早く追わんと見失ってしまう！」

（何やってんだらう、俺…）

巴の用件、それは、アイリスと大神のデートの尾行だった。

「…なあ、もう止めないか？嫌だよ、俺。」

「お前！大神殿が幼女趣味だと噂を流されたらどうするつもりだ！」
俺が止めても聞く耳持たない。

あと、その心配は杞憂だと思う。

「全く、機会があれば私だって、大神殿と…」

「…ん？巴って、ひよつとして大将のこと…？」

「そ、そそそ、そんなわけ無いだらう！？お前は見る目が無いな！」

巴は否定しているが、顔を茹で蛸のように赤くして言われても説得力が無い。

（全く。鈍いだの乙女ブレイカーだの言われた俺に気付かれるとは…相当重症だな。）

とか思いながら生暖かい目で巴を見る。

すると、いきなり活動写真館が爆発した。

(な、何だ！？)

活動写真館の方を見ると、慌てふためく大神と気を失ったアイリスの姿があった。

騒動の後、俺達と大神は支配人室に呼び出され、叱責を受けた。

「優也、今回のこと、済まないと思っている。」

支配人室を出た後、巴に謝られた。

「いいよ巴。気にしてない。」

「だが！」

「悪いと思うなら、きちんと尾行したことを反省するんだ。…いいな？」

勿論、反省するのは俺もだが。

「分かった、反省する。ありがとう、優也。」

巴がそう言って部屋に戻るのを見届けた後、俺も部屋に戻るのだった。

翌日

「どうや？柊はん、新生ブラックスミスは。」

「紅蘭、全部あんたに任せて、本当に済まない。」

「ええて。ウチも楽しかったし。」

紅蘭は何から何まで一人でやってくれた。

これには、感謝してもしきれない。

「…ところで、どんなふうになってるの？」コレ。」

「それは使ってからのお楽しみやで…！」

何が起るのか非常に気になる。

「…まあ、ブラックスミスはいいとして、…『アレ』は？」

俺は黄色い【光武】を見て尋ねる。

「アレはアイリスのや。」「ならアイリスも遂に？」「せや。」

などと話していると、急にアイリスがこちらに走ってきた。

「アイリス？どうした？」

「…うるさい…！」

アイリスは俺を突き飛ばし、黄色い光武に乗って、消えてしまった。

それと同時に、魔操機兵出現の警報。

「柊はん！」

「…ああ。」

俺と紅蘭は指令室に向かった。

同時刻、浅草

「オンキリキリバサラウンバツタ、オンキリキリ…」

魔操機兵が出現した浅草では、大男が老人達と同じ様に、呪文を唱え、楔を埋め込んでいた。

「そこまでよ！」

お馴染みの台詞と共に、光武達が姿を現す。

「来たか。【帝国華撃団】！兄者の敵、この【白銀の羅刹】がとらせてもらう！」

大男が名乗る。

(…あいつ等兄弟だったんだ…)

全然似てない。

そんなことを思っていると、いきなりアイリスの光武が現れた。

しかし、アイリスは俺達に気付くと、逃げてしまった。

「優也！俺達はアイリスを説得する！君は奴を！」

大神が告げる。

「了解、大将！おい！お前！」

「何だ、貴様！」

「お前の兄貴、案外大したこと無いね！拍子抜けしたよ！」

大男を挑発してやる。

「貴様！兄者を侮辱したな！許さん！」

「不満があるなら、俺を黙らせな！一対一でな！」

「いいだろう。…【銀角】！」

大男が機体を呼び出す。

その機体は両手に棘の付いた鉄球を装備していた。

「兄者を侮辱した罪…その身で払ってもらおう！」

「残念だったな！お前も兄貴の所へ逝かせてやるぜ！」

雷門の内側で、俺の光刃と【銀角】の鉄球が衝突した。

（コイツ、かなり手強い！）

時間がたつにつれて、俺は追い詰められていた。

銀角は圧倒的な破壊力と共に、堅牢さも持ち合わせていた。

堅い装甲に攻撃は阻まれ、鉄球の凄まじい破壊力に苦戦を強いられていた。

「貴様如きがこの銀角を穿てると思ったのか？片腹痛いわ！」

羅刹が吐き捨てるように言う。

「まずは貴様から兄者の敵を討たせてもらおう！」

そう言っつて銀角が腕を振り上げる。

「そうはさせない！必殺！【狼虎滅却 快刀乱麻】！」

大神の必殺技が銀角の腕をはねのける。

「大将！アイリスは？」

「大丈夫だ！それより、遅くなって済まない！」

どうやら、ここに【帝国華撃団】が勢揃いしたらしい。

「ならば、皆さんであいつにリターンマッチといきますか！」

今なら、負ける気がしない！

「その前に、優也は回復しないと。アイリス、頼むよ。」

「うん、お兄ちゃん。【アイリス・マリオネット】！」

銀角との戦闘で消耗した俺の武装がアイリスの力でみるみるうちに

修復した。

「凄い、エネルギーも全快だ！アイリス、ありがとう！」

「優也、行こう！」

アイリスが力強く言ってきた。

「勿論！皆さん、援護を頼みます！プロト！アレを今試す！」
『了解。』

光武達の援護をもらい、俺は銀角に突撃した。

「何をするつもりか知らんが、無駄だ！」

羅刹が吠える。

「どうかな？…来い！」

俺は漆黒の鉄槌を呼び出し、

「受ける！華撃団の発明王、李 紅蘭改造の新生ブラックスミス！」

銀角に叩きつけた。

ブラックスミスは爆風を放ち、銀角を包み込んだ。

「ぐあああ！馬鹿なあー！」

全身を爆風に包まれた銀角と羅刹は、断末魔の叫びを残し、散った。

(…凄まじすぎる威力だな。)

予想の遥か上の威力に驚く。

「柊はん。」

紅蘭に呼ばれる。

やはり、あの口上は恥ずかしかったか。

「もつと言ってーな！あの口上めっちゃええわ！」

気に入ったらしい。

「まあ、それはともかく、皆さん。」

「ああ！『勝利のポーズ』、決めっ！」

勝利のポーズを決め、引き上げた。

「アイリス、お兄ちゃんとデートのやり直しをするの！」

アイリスが嬉しそうに言う。

「よかったな、アイリス。」

「うん！あ、お兄ちゃんだ！また後でね、優也！」

アイリスはやって来た大神と手をつなぎ、街へ出かけていった。

「…さて、俺はすねてるお嬢を宥めますか。」

アイリス達を見送った後、俺はむくれてしまった巴を宥めるのだった。

第六話 デートの尾行と新戦力（後書き）

作者です。前話から更新に時間がかかってしまいました。

今回の話はかなり強引な話になっております。

読みづらいと思いますが、どうかご容赦ください。

では、また。

第七話 新たな出会い（前書き）

第七話

新たな出会い

第七話 新たな出会い

深川の廃墟に怪しい反応がある、と言うことで大神とカンナとスミレが調査に向かった。

大神達の報告を待つ間、俺は巴と稽古をしていた。

「やつ！」

「ふっ！」

「せいっ！」

「はあっ！」

掛け声と共に竹刀を打ち合う。

「やあっ！」

「ちっ！」

巴の打ち込みで竹刀を落としてしまった。

「受ける必殺、天下無双剣！」

「甘い！」

巴の攻撃を避け、落とした竹刀を拾い、

「そこっ！」

胴に打ち込んだ。

「今度こそ勝った、と思ったのに…」

「これで15連勝だな。」

「うるさい！次こそ勝つ！」

食堂で稽古を振り返る。

「…ところで、優也、昼食は？」

「目の前にあるが？」

目の前にはコップの水一杯。

「こんなので腹が膨れるか！」

巴が言った。

人の食生活をどうこう言わないでほしい。

「いい機会だ。私が昼食を作ってやる。」

「そう？じゃお願い。」

どんな料理を作るか気になったので、頼むことにする。

「じゃあ、待っている。」

そう言って巴は厨房に向かった。

(…:そついや巴って、『彼女』の先祖、だったな…)

彼女の料理の味を思い出し、いやな予感がした。

(いや、待て。もしかしたら、彼女が凄まじいだけで巴はまともな料理を作れるはず！)

という俺の淡い期待を華麗に裏切り、厨房からは、紫色の煙が漂ってきた。

これ、絶対普通の料理じゃない。

「プロト。逃げよう。」

『了解。逃走開始。』

一刻も早くここから逃げ「出来たぞ！優也！」ないとして、馬鹿な！？

「さあ、食べてくれ。」

「くっ……」

巴が作ったのは紫色の湯気を出す「何か」。

(こうなったら、見た目は酷いが味はいい、という奇跡を信じるしかない！)

奇跡を祈りながら、巴の作ったソレを口にす。

勿論、奇跡は起きなかった。

(よく生きてるな、俺……)

完全に昇天するかと思っただが、なんとか生き延びたらしい。

「…巴。お前はもう料理するな。」

「何故だ！？私は料理が大好きなのに！」

その大好きな料理が大問題なんだ。

「じゃあ…じゃあ、お前は料理出来るのか！出来ないだろう！？」

そういう問題じゃない。

「いや！私よりお前が料理が上手くないと止めないからな！」

「…はあ。分かったよ。少し待ってる。」

厨房に向い、簡単なものを作る。

「ほれ。」

「くっ…。美味しい…。」

俺が作ったのはホットケーキ。

俺の朝食の一品だ。

「そういうえば、お前は毎朝、これとベーコンエッグとサラダだな。」

「ああ。」

ここでは珍しいかも知れないが、欧米では別に、特別不思議な朝食じゃない。

「確かに、私の負けだ。だが、私は料理を止めないからな！」

(勘弁してくれよ…。)

少々うんざりしていると、

「話は変わるが、優也。どうして、カンナさんとスミレさんはあんなに喧嘩ばかりしているんだ？」

巴にカンナとスミレのことを質問された。

というのも、少し前に二人が舞台のことで大喧嘩してしまい、未だに仲直りしていなかったからである。

「あの二人は巴が思ってる程仲は悪くないよ。」

「でも、顔を合わせる度に言い争いばかりしているし…。」

気持ちは解らないでもない、だが…

「喧嘩するほど仲がいいって言うだろ？キツカケさえあれば仲直りするよ。なあ？プロト。」

『肯定。あの二人は互いに意地っ張りで素直になれないだけだ。』

じゃなきゃ、あんなに息はピッタリ合わない。と、話していると指令室集合の警報が鳴った。

「行きますか。」

「うむ。」

指令室

「大神君から連絡があったわ。大神君達は今、魔操機兵に囲まれています。」

あやめが告げる。

「大神さん……」

さくらが心配そうに呟く。

「柊君は先行して大神君達を救助して。」

「分かりました。」

「他のみんなは、柊君が大神君達と合流したら出撃！……頼むわよ。」

「……了解！」「……」

深川

「【脇侍】ども！こやつらをやっておしまい！」

赤衣着物の女が配下の魔操機兵に命じる。

「そうはさせるか！」

爆風が魔操機兵を吹き飛ばす。

「優也！」

「遅えぞ！」

「もう少し早く来てくださらない？。」

三人と合流し、カンナとスマレに軽口を叩かれる。

「ええい！貴様一人来ようと状況は変わらぬ！」

「どうかな？」

切り札は…もう来ている！

「そこまでよ！」

上空から、【光武】が降りてくる。

…が、風に流され、どこかへ行ってしまった。

「あれが貴様等の切り札かえ？随分間抜けよのう。」

女が小馬鹿にした言い方をする。

ち、違うんだ。あれはたまたま風に流されただけで、本当は颯爽と降り立つはずだったんだ！

『柊君、大神君！さくら達は間に合わないわ！大神君達の光武をいまそつちに射出します！』

上空から大神達の光武が降りてくる。

今度は風に流されずにすんだ。

「ちっ…。」

こんな手で来るとは、完全に想定外だ。

「さあ、認めよ！貴様等はこの【紅のミロク】に齒が立たないと！」

ミロクと名乗った女が言い放つ。

…俺は賭にでることにした。

「…怖いか？」

「…え？」

人質の少女に話しかける。

「優也？」

「ちよつとだけ、大将。…こいつらが怖いか？」
「…」

少女は答えない。

「怖いなら…求める。俺達を頼れ。」

それだけの力は、ある！

「今一度訊く。…どうする？」
「…助けて！」

少女が叫んだ。

「任せる！」

即座に銃を展開し魔操機兵を撃ち抜く。

「貴様！ものども、小娘もろとも奴等を殺せ！」

ミロクが魔操機兵に命じる。

「優也！」

「大丈夫！」

俺は少女の元へ一気に近づき、

「ちょっと揺れるけど、我慢してくれよ！」

「ハ、ハイ！」

少女を抱きかかえて後退する。

少女の顔が赤らんだ気がするが、気のせいだろう。

「大将！この子、任せる！」

「優也はどうするんだ？」

「あいつ等を蹴散らす！」

「分かった！」

「プロト！」

『了解。変形、開始。』

銃の形が変化し、照準の名を持つ者の持つスナイパーライフルに変

形した。

同時に、顔に照準用バイザーが展開する。

『敵機照準!』

「狙い撃つぜええー!」

次々に照準し、撃ち抜く。

一分もかからずに敵は壊滅した。

「遅れて申し訳ない!」

俺が壊滅させた後、光武達が到着した。

「おのれ…ならば!」

「きゃあっ!」

ミロクがさくらの光武に攻撃した。

「大丈夫か!?!」

「…全然平気ですけど?」

どうやら無傷の様子。

…何がしたかったんだ?

「フツ…。」

不適な笑みを残し、ミロクは消えた。

「大将、あの子は？」

「緊張の糸が切れたんだろう。気を失ってる。」
「そうか…。」

何気なく少女を見る。

「！？大将！」

「どうした！？」

「彼女の右腕を見てくれ！」

少女の右腕には俺と同じ変換デバイスがあった。

「まさか…！？」

「ああ。恐らく、俺と同じ時代の人間だ！」

第七話 新たな出会い（後書き）

作者です。

最近サブタイトルを考えるのが大変です。

ボキャブラリー不足な自分が憎い。

今回もかなり無理矢理な話になってしまいました。

読者の皆様申し訳ありません。

今回は、主人公をパワーアップさせようと思います。

ひょっとしたら、長くなるので前後編になるかもしれません。

では、またお付き合いください。

第八話 雄々しき翼 前編（前書き）

第八話

雄々しき翼 前編

第八話 雄々しき翼 前編

気がつけば、私は見知らぬ場所において、自由を奪われていた。

「さあ、認めよ！貴様等はこの【紅のミロク】に齒が立たないと！」
私を人質として連れてきた女の人が、対峙する人達に言い放っていた。

（どう転んでも、私は死ぬんだ…）

私が絶望にとらわれかけた、その時、

「…怖いか？」

「…え？」

白い装甲に身を包んだ男の人が尋ねてきた。

（何を言ってるんだろう…？）

「…こいつらが怖いか？」

「…」

答えられなかった。

確かに怖い。でも、私は、怖いと言えなかった。

「怖いなら…求める。俺達を頼れ。…今一度訊く。…どうする？」

男の人の言葉に、私は夢中で叫んでいた。

「…助けて!」

「任せる!」

彼はそう言って、私を助けてくれた。

「ちょっと揺れるけど我慢してくれよ!」

そう言って私を「お姫様だっこ」で抱きかかえて、仲間の人の所へ彼の顔を見たとき、私は彼に心を奪われていた。

(ああ…。私、この人を好きになったんだ…)。

意識を失うその時まで、私の胸の高鳴りは収まらなかった。

「大将、彼女は?」

「あやめさんの部屋だ。」

あれから一日たち、俺は彼女が目を覚ました、と聞き、事情を聞くため大神と一緒に、彼女の元へ向かっていた。

「あやめさん、失礼します。」

ドアをノックし、返事を待つ。

「ええ。入って。」

部屋に入れてもらう。

すると、彼女は顔を真っ赤にし、隠れてしまった。

(何だ！？俺が何かしたのか！？)

隠れられる様なことは多分してない！…はず。

「ま、まあ、隠れたまんまでいいから、聞かせてくれ。…何があったかを。」

『私が話そう。』

何処からか、威厳のある声が聞こえてきた。

「…？誰？」

『ここだ。』

「！？」

なんと、声は彼女の胸元のペンダントが放っているではないか！

「…えっと、あなたは？」

『むう、まだ自己紹介していなかったな。…私は「レーバティン」。この子の保護者代わりだ。』

「はあ…。」

人間、突っ込みどころがありすぎると、うまく反応出来ない。

『そして、この子が「クリス・レインテッド」。』

「…【妖精姫】、か。」

確か、時空転移関連の研究者の娘だったはず。

「知ってるのか？優也？」

「直接見た訳じゃない。機体の開発に、声だけで参加してたな、確か。」

大神の問いに記憶を辿って答える。

「…話が逸れたな。じゃあレーバテインさん、聞かせてくれ。」
『うむ。』

「なるほど…研究所に「奴」が現れ、親御さん達があんたを時空転移させ逃がした、と言っわけだ。」

レーバテインによると、奴、「フレイヤ」は、いきなり研究所に現れ、時空転移のデータをよこせと要求してきたらしい。

拒否すると、奴は研究所を壊滅させた、とのこと。

『うむ。他の研究者たちが時間を稼いでいるうちに、この子の親が時空の穴を開け、我々を逃がしたのだ。』

「大変だったな。」

『そう言う貴公は？』

レーバテインの問いに、

「それは俺が話すよ。」

俺に代わり、大神が説明してくれた。

『ふむ。貴公も苦難を味わったのだな。』

「あんたら程ではないさ。」

「…あの！」

「!?!?」

今まで黙っていたクリスが口を開く。

いきなりでかなり驚いた。

「…め、メロンパンは好きですか!?!?」

何を…言っているんだ…?!

「…えっと、メロンパンは普通かな。何故?」

『理解不能。』

俺とプロトには全然分からない。

「そう…ですか…。」

俺の答えにしよんぼりとするクリス。

…俺が悪いのか?

『ま、まあ、クリスのあれは気にしないでくれ。…それより、貴公はこの者達に協力しているそうだな。』

「…？そうだが？」

いきなり何を言うんだ？

『ならば、その役目、我々に譲って頂きたい。』

「何を言っているんだ！」

大神が立ち上がり、怒鳴る。

「…一緒に戦う、という選択肢は？」

俺はできるだけ冷静に訊いてみる。

『無い、もとより、旧式の機体で戦うロートルに何が出来るというのだ？』

「ち、ちよつと！レーバティン！？」

クリスが慌てる。

だが、

「何だって出来るさ。ぼつと出のひよっこに比べれば。」

『肯定。ルーキーに負ける程、まだ劣化していない。』

レーバティンの挑発に挑発で返してやる。

『…よかろう。クリス、このもの達と模擬戦闘で結論を出そう。』
「でも！」

クリスとレーバティンがもめている様子。

「俺達は何でも構わない。」

「分かった、優也。ただし、これは入隊試験とする！」

大神が宣言する。

「ああ。」

『承知した。』

宣言に同意する。

「一時間後に中庭で開始する。その間に準備をしてくれ。」

こうして、クリスの入隊試験の名目で模擬戦闘をする事になった。

クリス side

「レーバティン、どうして、あんな事言ったの？」

準備をしながら、ペンダントに訊いてみる。

『…あの者には致命的な【弱点】がある。このままでは死んでしま
う。』

「そんな！」

『だからこそ、我々が止めるのだ。…彼等が取り返しのつかない事
態にならないために。』

レーバティンは、冷静に理由を話してくれた。

『…それに、お前が惚れた男の実力を見てみたかったからだ。』
「…っ！」

どうやら、私のお目付役は全てお見通しらしい。

「…レーバテイン。私、勝つよ。この【アストレア】で！」

『そのいきだ。…弱点があるとは言え、彼等は強い。…注意しろ。』

「うん！」

私の思い、力、全てぶつける！

私は準備を終え、中庭へ向かった。

優也 side

『…どう戦うっ？』

プロトが訊いてきた。

「…どうもこうも無い。今までどおり、自分の戦い方を貫くだけだ。」

『相手はアストレア。強敵。』

確かに、アストレアは強力だ。

だが…

「自分が作った機体だぞ？どこをどう狙うかなんて分かりすぎてる。」

「

『…愚問だった。行くか。』
「ああ。」

程よい緊張感に包まれ、俺は中庭へ向かった。

中庭

「双方、準備はいいな？」

大神が訊いてくる。

「大丈夫です！」

「OKだ。」

互いに武装展開しながら応える。

「どうなるんだろうな？」

「どっちが勝ってもおかしくない試合ね。」

花組の皆さんも見物に来たようだ。

「勝敗は、決定的な一撃をきめた者の勝ちとする！では…始め！」

「はあっ！」

「やあっ！」

俺の刃と、クリスの太刀が激突する。

「くっ！」

力は俺の方が上の筈なのに、押し負けてしまった。

「なら、これで！」

銃を展開し撃つ。

だがクリスの纏うマントに阻まれ銃弾がクリスに届かない。

『貴公には弱点がある、なるほど、遠近双方攻撃が正確かつ緻密だ。だが、それ故に攻撃を読まれやすいのだ！』

「…！」

まさか、俺にそんな弱点があるなんて！

『接近戦は体が一瞬沈み、射撃は死角に回り込もうとする。驚くほど読みやすい！』

「ならば」

『目くらまし、か？』

「…！」

俺のやるうとすること、全てが読まれている！

「行きます！【朱雀翼】！」

クリスの眼と髪が、蒼と銀から、真紅に変わり、全身を焰で覆い、焰を不死鳥の姿に変え、突っ込んでくる。

（ブラックスミスで焔を吹き飛ばすか？…駄目だ！威力が強すぎる！）

クリスまで吹き飛ばしてしまう！

「…私達の…勝ち、です…。」

「…」

俺の一瞬の迷いをつき、クリスの太刀が俺の喉元に突きつけられていた。

「そこまで、勝者、クリス！」

大神の声がどこか遠く聞こえる。

『貴公には弱点があると言ったが、あれだけではない。』

「…」

俺にまだ何かあるのか。

『…貴公の攻撃は軽い。』

「…」

『強き想い無き刃では、何人も穿てぬ。…後は我々に任せよ。』

「あのっ、ありがとうございます！」

クリスとレーバティンはそう言って去っていった。

（俺の攻撃が軽い…想いが無い…）

負けたショックより、レーバティンに言われた一言が俺に重くのし

かかっていた。

夜

「優也、ここに居たのか。」

「見回りかい？大将。」

見回り中の大神が声をかけてきた。

「昼は…その、残念だったな。」

「いや、彼女が強いことが証明できた。悪くないさ。」

実際、あの後花組の皆さんにも歓迎されていたし。

「…何か悩んでいるのか？」

「…ああ。…レーバティンに言われた。俺の攻撃は軽い、想いが無いって。」

「そうか…。」

この事があって、俺の心は晴れなかった。

「…優也。君の迷いに俺は手助け出来ない。だが…君ならきつとど
うにかなる。」

「…そうなるといいけど。」

「もう夜も遅い。そろそろ部屋に戻るんだ。」

「了解。」

部屋に戻り、眠りにつこうとするが寝付けず、長い夜を過ごすこと

になつた。

第八話 後編 雄々しき翼（前書き）

第八話 後編

雄々しき翼

第八話 後編 雄々しき翼

レーバティンに言われた、あの一言が俺に未だに俺にのしかかっていた。

なるべく考えないように努力したが、尽きぬ迷いは、俺を離してはくれなかった。

「…優也。気分が晴れないなら、気晴らしに街に出てみたらどうだ？」

大神に言われた。

「だが、まだやることが残ってるし…。」

「今は俺が代わりにやっておくから。」

大神にそう言われる程、俺は酷い状態なのだろう。

「…分かった。ありがとう、大将。」

大神に後の事を任せ、俺は街に出た。

…正直、街を練り歩いてどうにかなるとは到底思えないが。

サロン

「柊はんは？」

「今出かけた。…かなり悩んでいたよ。」

大神と紅蘭が話している。

「やっぱり、あれが？」

私は尋ねてみた。

「ああ。言われた一言がずしんときたみたいだ。」
「そうですか…。」

その後、私は彼と話をしていない。

避けられている訳ではないが、タイミングが微妙に合わなかったのだ。

「せっかくだから聞いておきたい。レーバティン、どうして、優也にあんな事を言ったんだ？」

大神がレーバティンに尋ねる。

私も理由を聞きたかった。

『…あの者達には、明確な【理由】が無い。』

「…理由？」

『うむ、あの者達は「この時代を変えてしまった、これ以上の変化を防がなければいけない!」、という【義務感】で戦っていた。』

「…!」

皆が驚きの表情を浮かべる。

『今までのままでは、あの者達はいずれ、太刀打ち出来ない敵にぶつかる。そうさせないように、ああ言ったのだ。』

「そんな理由があったのか…。」

私を含めて、ここにいる全員が納得した。

『…とはいえ、あの者達の攻撃は凄まじかった。』

「そうですか？簡単そうに避けていましたか？」

さくらが意外そうに言う。

『こちらの弱所を恐ろしく正確に、しかも、少しの間も見せずに攻撃してきた。…動きを見切れなければ確実に敗北していた。』

それは私も感じていた。

「…理由も分かったし、後は優也の復活を待つだけだ。」

『…あの者がそう容易くこの問題乗り越えると？』

大神の言葉にレーバティンが疑問を呈す。

「優也ならやってくれる。…少なくとも、俺はそう信じている。」

花組の皆さんも同意見の様子。

「…そうですね。私も信じます。」

必ず彼は復活する、そう信じ、彼のを想った。

街

街は活気で賑わい、人々皆笑顔のなか、俺は陰鬱な気分です歩いていました。

(皆さん生き生きしてるな。それに比べて、俺は…。)

気晴らしにと来たはいいが、全く気分は良くならなかった。

いくあても無く、ただ歩き続ける。

…どれだけ歩いただろうか、ふらりと立ち寄った公園で、俺はある絵に目を奪われた。

(…いい絵だな。)

これを描いた者は席を外している様だが、その絵は俺の暗い気持ちを少し取り払ってくれた。

「僕の絵に何か用かな？」

どうやら作者が戻ってきたらしい。

「いや、ちょっと眺めていただけさ。」

答えながら、作者の顔を見るため、振り向く。

「!?!?」

「あれ？」

作者の顔は俺と瓜二つだった。

「いやーこの世には同じ顔の人が三人いるって言うけど、まさか、こんなに近くにいるとはねー。」

「全くだ。しかも、名字も『柊』、だもんな。」

場所を公園から甘味どころに移し、談笑していた。

「でもさ、優也っちてば、なんで僕の絵見てたの?」「優也っち言うな。…理由は無い。ただ見入ってただけだ。」

俺を優也っちと呼んだこの男、名を「柊 総一」と言う。

柊ではややこしいから、名前で呼び合うことになった。

「うーん、でもさ、優也っち、さっきまで暗い感じだったよ?何かあった?」

「…少し、な。」

「ふーん。それより、このあんみつ美味しいね。」

そっちから訊いてきて、ふーんで済ませるなよ。

「だって、それは自分で解決しなきゃいけない事なんですよ?口調で分かるよ。」

総一の分かっていた事に驚く。

…只ののほん野郎だと思っていたのに。

「…優也っち、かなりひどいよ？…まあいいや。これは僕の知り合いが言っていたんだけど、」

「…何だ？」

「自分が進むべき道を見失ったら、自分の心の中にある、一番大切な想いに従えって。」

「…！」

「…優也っち。君の想いは何？」

俺の想い…

目を閉じ、心の中の大切な「それ」を探す。

そして、気付いた。自分の一番大切な想いに。

「…ハハツ。何だ、こんなに近くに答えはあったじゃないか。」

難しく考えてた自分が馬鹿馬鹿しい。

「答えが出たみたいだね。」

「ああ。感情するよ、総一。」

答えは出た。後はそれを形にする！

『柘君！緊急事態よ！』

通信機からあやめの切羽詰まった声が響く。

「あやめさん、どうしました!？」

『上野に正体不明の機体が出現！大神君達が交戦中だけど苦戦しているわ！今すぐ援護に向かって！』

「了解！」

今の俺は一味違っ！

「総一。今度は俺の仲間と一緒にあんみつ食おうぜ。」
「良いね。楽しみにしてるよ。」

俺は自分のいるべき場所へ駆け出した。

上野

「きゃあー！」

「この敵、強い！」

上野では大神達は窮地に立たされていた。

魔操機兵ではない、十二体の金色の人型兵器に彼等は追い詰められていた。

「…その程度の実力でこの【ビット】達を倒せると思ったの？…甘いわね。」

フレイヤが嘲笑と共に呟く。

「なら、【朱雀翼】！」

クリスが渾身の一撃を放つ。
だが、その【ビット】と呼ばれし兵器はいとも容易く回避し、逆に強烈な反撃を叩き込んだ。

『まさか、朱雀翼も通用しないとは…!』

レーバテインが唸る。

「一人足りないけど、ひょっとして、逃げたのかしら?」

「そんなわけではない!」

フレイヤの一言に大神が激昂する。

「まあ、いいわ。あなた達、自分の未熟を恨みなさい。」

フレイヤが光刃を出力し、とどめをさそうとする。

その時、

『…忘れたのか、フレイヤさんよ? 主役は、遅れてやってくるんだぜ?』

フレイヤの光刃を受け止め、優也が現れた。

「優也!」

「悪いね、大将。遅れちゃったよ。」

「今更登場? 逃げたと思ったのよ?」

フレイヤが若干の驚きと共に言う。

「お生憎様。宿題を片付けてたんだよ。」

「まあ、あなたもビットに討たれなさい！」

ビット達が俺に銃口を向ける。

俺は目を閉じ、念じる。

「優也！駄目だ、逃げろ！」

大神の叫び声が聞こえる。

「じゃあ、バイバイ。白騎士さん。」

ビット達が俺に銃弾を放つ。

(…大丈夫だ。「君」は一人じゃない。「君」には、俺と、プロトと、…仲間たちがいる！)

銃弾が迫る。

(…仲間たちを助きたい。…敵を討つ為ではなく、大事な人達を護るため…力を貸してくれ！)

目を開けた瞬間、俺の機体を白光が包む。

「優也！？」

「なにが起こっている！？」

双方、固唾を飲み状況を見守る。

そして、光が消えた瞬間、ビットの一体が爆発した。

「!?!」

フレイヤが驚愕と共に周りを見渡す。

「これが、俺とプロトの真の機体だ!」

俺の機体は、肩に2つのコーン型のスラスターを搭載し、背中にXの形をした翼と長身の砲口を背負い、両手に剣を装備していた。

「…くっ、ビット達!」

「行くぜ、みんな!」

優也の声と共に、機体から6つの光が射出する。

光は人型に収束し、優也機と同じXの翼と砲口を装備した機体が出現した。

白と金の機体が互いに牽制しあい、動けなくなった。

「降伏しろ、フレイヤ!」

フレイヤに要求する。

「誰が降伏など…!」

「!?!」

いきなりフレイヤが頭を抑え、苦しみ始めた。

「ええい！引っ込んでいろ！」

フレイヤが叫んでいる。

何だ、何が起こっている！？

「…ごめんね。」

「！？待て！」

そう言っつて、フレイヤとビットは消えた。

『…反応、ロスト。』

「…今は大将達の所に戻るっ。」

『了解。』

「皆さん、ご心配おかけしました。」

帰還し、皆に謝る。

『答えが出たようだな。…いい目をしている。』

レーバテインが感心したように言う。

「あの、」

「？何、クリス？」

「僕もあの人達に興味が出たんだよね。」
『…そういうことにしておこう。ではな。』

そう言って電話は切れた。

「ふふっ。さあ、見せてもらおうよ、君達の戦いを。」

そう言って、彼は笑う。

実に楽しそうに…

第八話 後編 雄々しき翼（後書き）

最近雨多く、苦勞している作者です。

はい、前後編になってしまいました。

しかも、主人公の機体もあんな事にしてしまって…調子乗ってますい
ません。

しかし、後悔も反省もしません！

次回から、また原作に添った話に戻ります。

では、またお会いしましょう。

人物 機体紹介5 (前書き)

人物 機体紹介5

人物 機体紹介5

人物

クリス・レインテッド

生年月日

2461年 12月 7日

16歳

身長

152cm

体重

47kg

スリーサイズ

B 91 W 55 H 86

血液型

B型

ヒロインその2。銀髪碧眼で、小柄ながら胸が大きい。メロンパン

が大好物。戦闘時は、髪と目が真紅に変化する。

身に着けているペンダントにお目付役のレーバティンが居る。

レーバティン

クリスのペンダントの中に居る。威厳のある声と、冷静な判断でクリスを支える。

尚、レーバティンの大元の仕組みは、優也が昔開発した系列に属する。

機体

クリス機

基本的なイメージはシ○ナ。戦太刀を手に持ち、体を漆黒のマントで覆う。

太刀を持たぬ手から炎を出力させることが可能。

優也機その2

イメージはダ○ルオーガ○ダム+○ンダムX。

機体のプロテクトが解除された姿。

両肩にスラスタと兼用で障壁発生装置が移り、両手に武装を持つ。

両手の武装は、実体剣、銃、光刃の3つの形態に変形可能。

背中に決戦兵器を装備し、機体から自律兵器を6体射出可能。

しかし、この機体自身に未だ封印が施されている。

第九話 黙する者と（前書き）

第九話

黙する者と

第九話 黙する者と

それは、二回目の出撃での出来事だった。

雨降りしきる夜の上野で、俺達は戦っていた。

(…全員の動きが鈍い、 どうする?)

十分な整備をせぬまま出撃したので、皆本来の実力を発揮出来なかった。

「ならば、プロト!」

『了解、エンジェル・ハイロウ起動。』

背中から翼が出現し、全身が発光する。

とれる手段は一つ、追い詰められる前に倒す!

残像を残しながら、次々に魔操機兵を破壊する。

そして、魔操機兵は、戦闘能力を失った一機のみとなった。

「止めだ!」

大神の光武が刀を振り上げる。

「あかん、大神はん、光武はもう限界や!動かしたらアカン!」

紅蘭が叫ぶ。

「…分かった。」

「そうや。それに、ソイツやって、もう戦えへんし…」

紅蘭が言い終わる前に、魔操機兵は、動き出した。

「！逃がすか！」

両手の剣を銃に変形させ、魔操機兵を撃ち抜いた。

…今思えば、これがトリガーだった。

帝国劇場地下

戦闘が終了した後、俺達は、紅蘭に責められた。

彼女曰く、俺達は機械を大事にしていない、どうせ壊れたら、取り替えればいいと思っっているのだろう…と。

前々からこの様な不満はあったのだろう。

今回、それが我慢の限界を超えたらしい。

紅蘭は未だ光武から降りてこない。

俺は、紅蘭と一緒にいると言った大神に付き合うことにした。

「君まで付き合う必要はないぞ？優也。」

「気まぐれだよ気まぐれ。それに、地下で眠るのもいいもんだ。」

「そうか…」

「そうそう。」

何気なく大神と話す。

「…優也。」

「なんだい、大将？真剣な顔して。俺に告白かい？」

もしそうだったら、はったおす。

「茶化すな。…フレイヤの事だが…」

「そつちか。…何？」

「前々から感じていたが…彼女は操られているんじゃないか？」

「…どうして？」

「君が話してくれた彼女とあまりにも違いすぎる…それに、この前
あの苦しみ、そうとしか考えられない。」

確かに、あの苦しみは何かあったと推測出来る。

「中々興味深い話だが、今は紅蘭の事を想うべきだと思うが？」

半ば突き放すように言ったのは、俺も少なからず動揺していたから
だ。

「そう、だな。」

「…紅蘭の気持ちも解らなくはないんだ。確かに、俺達は少々機械
を乱暴に扱っていたからな。」

「ああ、反省すべきだな。」

大神の同意を得た上で続ける。

「だからと言って、敵は待つてはくれない。…大将、なんとか紅蘭と話し合おう。皆が納得する答えを捜すんだ。」

「その通り、だな。紅蘭の事は任せてくれ。…優也は、「彼女」の事を頼む。」

「…了解。」

大神と今後の方針を決め、眠りについた。

翌日

(…彼女の事を頼むと云われてもなあ…)

正直、何をどうしろと言うのか。

「柊さん。」

「ん？クリスか？」

「どうしたんです？難しい顔してますけど。」

そりゃそうだろう。かなりの難題だもん。

『我々で良ければ、相談してくれ。』

「まあ、話しておく。」

大神にも語った、彼女の話をした。途中、クリスがむっとした表情を浮かべたが、何だったんだろう？

『むう…フレイヤは、精神操作を受けている、か…』

大神の予想だから確証は無い。

『しかし、貴公はどうしたいのだ？』

レーバティンに問われる。

「…今まで、奴が、フレイヤが色々しかしたんだ、そう思って戦ってきた。」

『…』

「でも、彼女も操られている、そうだとしたら、彼女も被害者だ。」

『ならば、答えは出ているのだな？』

「勿論。…彼女を救出し、彼女を操る黒幕を討つ！…これが、俺の答えだ。」

例えそれがどれだけ困難でも必ず成功させる。

『いい目をしている。…今の貴公なら、不可能は無かるう。』

「仲間がいるから言える事だ。」

俺一人でなら、不可能だろう。

「…地下行ってくる。」

クリス達と別れ、地下へ向かった。

地下

(おっ、紅蘭と大将が話してる。)

少し離れた場所で見守る。

「…しかし、今まで悪いね、【光武】さん。」

黙って見ていると暇なので、光武に話し掛ける。

…端から見れば、俺はかなり痛い人だろう。

「俺達はまだ休む訳にはいかない。もう少し、つきあってくれよ。」

所詮独り言だ。返事は勿論無い。

だが、光武に言っておきたかった。

その時、魔操機兵出現の警報が鳴った。

(…今度は整備も完璧だ！前回とは違う！)

芝公園

芝公園に到着したが、まだ紅蘭は迷いがあるらしく、動きが悪かった。

「紅蘭、今は割り切れ。」「分かってるんや、これがコイツ等の為

なんやって…でも…。」

機械を大事に想うその気持ちは理解できる。

「でもな、誰かがやらなきゃいけないんだ。…辛いだろっが、我慢してくれ。」

「…了解です。」

会話を打ち切り、魔操機兵を掃討する。

だが、こちらの一瞬の隙を付き、魔操機兵が紅蘭に襲いかかった！

（まずい、紅蘭！）

急いで紅蘭の本へ向かうが、間に合わない！

魔操機兵が刀を振り下ろした、まさにその瞬間、紅蘭の光武が光を放った。

まるで紅蘭を護るかのように。

「…光武が…ウチを…護ってくれた…？」

紅蘭が呟く。

「…それが、光武の【願い】なんだよ。」

大神が言う。

光を喰らった魔操機兵も戦う気力を無くし、武器を捨てたようだ。

「なんと無様な！戦わぬならばいつそ自爆しろ！」

いきなり噎れた声が飛んできた。

声を聞いた魔操機兵は自爆してしまった。

「何で、何で自爆させるんや！」

「ふん！戦わぬ役立たずなど要らぬ！」

紅蘭の怒りに老人はさも当然のごとく言い放つ。

「貴様等は、この【黒之巢会】首領【天海】を怒らせた、その報いを受けるがいい！」

そう言つて、天海は地面から何かを出現させる。

「【蒼角】と…【銀角】！？馬鹿な！」

コイツ等は既に倒した筈！

「死人を甦らせたのだよ。無論、妖力は強化したかのう。」

「前に倒したんだ、弱点は見切っている！」

「残念だが、貴様の相手は別に居る。」

「何だと？」

「あの女、貴様を待ちわびておるぞ？」

フレイヤが別の場所で俺を待っているらしい。

「行ってこい、優也！」

「大将？何言つてんだ！」

「ここは俺達で十分だ！君は「彼女」を救ってこい！」

「「行け、優也！」」

「了解！捕らわれのプリンスを助けてくる！ここは任せた！」

ここから離脱し、フレイヤの元へ向かう。

(…待つてろ、俺の答えを見せてやる！)

某所

「…見えた、そこか！」

フレイヤの反応を見つけ、対峙する。

「…久しぶり、だね。」

「…水瀬さん。」

そこに居たのは、彼女だった。

「…教えてください、今まで、何があつたか。」

「うん。…でもね、お願いがあるんだ。」

「…何です？」

彼女の言わんとする事は分かるが、尋ねる。

「…話が終わった後、私を殺してほしい。」

「何故です？」

「今は何とか、押さえつけられているけど、またもう少ししたら、また、「あの人」に支配されちゃう。」

「…」

「…だから、私が私のままで要るために、お願い。」

理由は分かった。だが…

「…拒否します。」

「えっ…。」

「俺はあなたを助ける為に来たんです。殺す為じゃない。」

「でも、でも！私にもあの人呪縛は解けないんだよ！…？どうするの！？」

方法は…かなり力ずくだけど、

「フレイヤに変わって下さい。」

「…！」

「俺とあなたで奴をあなたから追い出します。」

「…分かった。信じてるよ、柊君。」

そう言つて、彼女の雰囲気が変わった。

「馬鹿ね、私を追い出すなんてできる訳ないのに。」

「ぐだぐだ言つてないでかかってきたらどうだ？」

「っ！後悔なさい！」

フレイヤが遮二無二攻撃してくる。

俺はその攻撃を容易く避け、

「はあっ！」

怒涛の勢いで攻め立てる。

そして、

「彼女は…返してもらおう…！」

フレイヤの背中を捉える。

「あなたの…物じゃ、無いじゃない！」

「…そうだな、だから…奪わしてもらおう！」

フレイヤに裂帛の気合いを放つ。

「ぐっ！」

「水瀬さん今です！フレイヤを！」

水瀬、精神

『水瀬さん今です！フレイヤを！』

彼の声が聞こえる。

うん、私、やるよ！

「無駄よ、あなたでは私を追い出せない！」

出来る！

「何！？何故、何故あなたがこれほどの力を！今までは私にされるがままだったのに！？」

彼が…柊君が居る！だから、負けない！

「くっ！」

恋する乙女は無敵なんだよ！私から出て行って！

「あ、あああー！」

「あ、あああー！」

フレイヤが頭を抑え、倒れてゆく。

俺は彼女を抱き止めた。

「…柊…君、私やったよ…。」

「はい、今は眠ってください。俺がついています。」

「…う…ん。」

そうして彼女は眠りについた。

俺は彼女を背負い大神達の本へ戻った。

「…彼女は？」

「昏睡状態らしい。いつ目覚めるか解らないって。」

彼女は力を使い果たし、力を取り戻すため、眠っているのだとか。

「優也、あの人、言ってるよ？」

「何を？アイリス。」

「『私は必ず起きるから心配しないで』って。」

「そう、か。」

「後、『浮気は許さない』って。何の事？」

「さあ？」

全く身に覚えが無い。

だが俺は信じてる。彼女が又、あの笑顔を見せてくれると。

第九話 黙する者と（後書き）

最近、暑くなってきました。皆様、熱中症には十分お気をつけ下さい。

お久しぶりです。作者です。

いやはや、気づけば、閲覧累計四万オーバー！

皆様、本当に有難うございます。

文才の無い大馬鹿者ですが、もうしばらくお付き合い下さい。

又時間がかかると思いますが、次回またお会いしましょう。

第10話 嵐の前の…（前書き）

第十話

嵐の前の…

第10話 嵐の前の…

「ふう…。疲れた。」

今日は、公演の打ち上げで、皆準備に駆け回っていた。

俺は自分のやるべき事を終え、一休みしていた。

『もうすぐ始まる。行かなくていいのか?』

「かまわないよ、プロト。第一、俺はドンチャン騒ぎは好きじゃない。」

楽しくやるのは良いが、下手に絡まれるのは嫌だ。

「あ、柊さん、ここに居たんですね。皆さん待ってますよ。」

「クリスマス?皆待ってるって?」

「大神さんが言っていました。『あいつは来たがらないから、引きずってでも連れてこい』って。」

どうあっても、俺は参加しなければいけないらしい。

「分かった、行くよ。」

俺はクリスと、楽屋へ向かった。

楽屋

「「「お疲れ様でした!」「」」

皆のお疲れ様の掛け声で、打ち上げが始まった。

皆、ノンストップで楽しんでいる。

「優也、楽しんでいる?」

「大将、余り羽目を外し過ぎるなよ。」

まだ敵は居なくなつた訳ではない。

「たまには息抜きしないと。さあ、次は君が芸を見せる番だ!」

「はあ!?!なにそれ!?!」

何一つ聞いてない!

「この場のノリだ!任せた!」

覚えてるよ、いつかしばき倒す。

「…えー、では、拙き物ではありますが、ご覧ください。」

.....

「凄かったですね、柊さん。」

「喜んでもらえてなによりだ。」

「私を含めて、皆笑ってましたよ。」

自分の芸を終え、さくらと談笑する。

俺がやったのは、ここに居る全員の声まねで、即席のコントを披露した。

「でも、本当にソックリでしたよ？カンナさんとスミレさんの喧嘩のネタだって、本人かと思いましたがもん。」

「あれはやりやすかったよ。後、大将の件も。」

大神でのネタは、覗きを実行しようとし、試行錯誤する姿を真似た。やった後は大神は顔が真っ青になっていたし、花組の全員から詰問されていた。

…ざまあ。

「…ところで、さくらさんよ、元気がないな。何かあったか？」

「え？そ、そんなこと無いですよ？」

嘘つけ、顔は笑顔だが、全身にいつもの快活さが無い。

「…まあ、無理に聞かないけど。」

「…ちょっと、買い出しに行ってください。」

そう言って、さくらは出て行った。

暫くたって、雨が降り始めた。

周りを見ると、カンナ達が何やら白い布を被り、お化けの格好(?)をしていた。

「…何やってんの？」

余りにくだらなすぎる。

「いやね、買い出しから帰ってきたさくらを驚かそうと思ってね。」

おいおい、子供か、アンタ等。

呆れていると、

”ゴロゴロ、ドカーン！”

近くに雷が落ちた。

「きゃあああー！！」

扉の向こうから、さくらの悲鳴が聞こえてきた。

「どっした、さくら君！？」

大神の問いに、たださくらは震えているだけだった。

暫くたって、ようやくさくらは落ち着いた。

少々、さくらの顔色が悪い事もあり、打ち上げはお開きとなった。

「大将、さくらの具合は？」

「あまり良くない。」

「しかし、雷が苦手ね。知らなかったよ。」

予想するに、小さい頃に何かあったのだろう。

「…さくらのことは大将に任せる。一番仲が良いからな。」

こういう事は気心の知れた相手の方がいい。

「ああ、さくら君は任せてくれ。」

大神と別れ、場所を移す。

(さて、やることは無いけどどうしようかな?)

意味もなく地下に来た。

その時、凄まじい揺れが襲った。

(何者かが、侵入している!?)

揺れの発生源に向かう。

「遅かったのう。」

「貴様は【紅のミロク】! どうしてここが解った!?!」

「あの桃色の機体に、式神を憑けただけのこと。」

あの一撃は、攻撃では無く、こちらの本拠地を探る為だったのか!

「柊さん、援護します!」

クリス等が駆けつける。

「大将とさくらは!？」

「瓦礫が崩壊して閉じ込められているそうです!」

状況はかなり不利、だが、大神達は必ず来る!

「持ちこたえてみせる!だから、速く来てくれよ、お二人さん!」

「なかなかどうして粘る。だが、もう限界ぞ?」

「くっ、体が動かない…」

奴らは毒性のある気体でこちらの動きを鈍くし、配下の【紅蜂隊】と呼ばれし紅き魔操機兵の素早い一撃で、俺達を翻弄した。

「そろそろ、地獄に送ってやろう。紅蜂共、おやり!」

とどめを刺さんと武器を振り上げた、その時、

「【破邪剣征 桜花放神】!」

敵の進撃を防ぐため閉じられた隔壁ごと桜色の衝撃波で魔操機兵を破壊し、大神とさくらの【光武】が現れた。

「美味しいところを持って行く、流石、千両役者だな。」

「遅くなった!」

「ぬづう、あと一步の所で！こうなれば、出でよ、【孔雀】！」

ミロクが叫ぶと共に、紅色の豪華な装飾の機体が出現した。

「我が一撃を受けるがいい！」

ミロクが孔雀を駆り、攻撃してくる。

だが遅い！

「クリス！連携攻撃だ！」

「了解です！」

前から訓練していた、あの技を今使っ！

「村正！」

「炎よ！」

俺が村正を展開し切りつけ、クリスが炎弾で視界を塞ぐ。

そして、クリスの炎を太刀に纏わせ、二人は滅多切りにする！

「これぞ！」

「連携！」

「『紅蓮十文字』！！！」

言つと同時に、縦と横の斬撃が孔雀を襲った。

「ふ、ふふふ…お喜びください天海様！このミロク、見事小奴らを足止めしましたぞ！」

「何！？足止めだと！？」

奴らの狙いに嵌ったということか！

「遂に、遂に【六星降魔陣】が完成した！…愚かなる帝都の者共、思い知るがいい！」

天海が叫んだ。

「ぐっ！」

突如、凄まじい揺れが発生した。

「あーはっはっは！天海様、妾は、妾はやりましたぞ！」

狂ったように笑いながら、ミロクは地割れに呑み込まれ、消えた。

「ああっ…！」

「さくら君！？」

大神がさくらに呼びかけるが、返事はない。

俺は、ただ大神を見ることしかできなかった。

第10話 嵐の前の…（後書き）

作者です。そろそろ、物語が後半に差し掛かって来ました。

また今話に誤字があるかもしれません。

ご迷惑をおかけしますかも知れませんが、前もって、謝罪致します。

申し訳ございません。

では、また。

第十一話 前編 決戦、黒之巢会（前書き）

第十一話

決戦、黒之巢会

第十一話 前編 決戦、黒之巢会

(これが、【六星降魔陣】、か。)

天海が起こした六星降魔陣、それは、帝都を滅茶苦茶にした。

建物は崩れ、火の手が上がり、人々皆恐怖していた。

更に、

「大将、どうだった？」

「…さくら君は『トランス状態』に陥っているらしい。」

「要するに？」

「キツカケがあれば、目覚めるかもしれないそうだ。」

ミロクとの戦いの後、意識を失ったさくらは、まだ意識を取り戻していなかった。

「優也は何をしているんだ？」

「…水瀬さんの変換デバイスを改造していたんだ。」

「何のために？」

「…今のデバイスは、フレイヤに操られたトラウマを与えてしまう。

…またこれを彼女が使った時がきつと来る。その時の為に、やっておきたかったんだ。」

彼女もまだ目覚めていない。

ひょっとしたら、俺の行為は意味がないのかもしれない。

それでも、何かやっておきたかった。

「今は指令室へ行こう。皆が待ってる。」

「ああ……」

足取り重く、俺達は指令室へ向かった。

指令室

「先程、奴から要求が来た。…俺の身柄の引き渡しと、国庫の全てをよこせ、だそうだ。」

米田が重々しく告げる。

「そんなもの、呑めるわけがありません！」

大神が怒鳴る。

「しかし、どうしようもない。何かとっておきの手段があるのか？」

米田の問いに、皆押し黙ってしまった。

「…皆分かってないね。」「優也？」

「どうしようもない？そんなの、関係あるか！」

何故やる前に絶望する……！！

「出来るかどうかじゃない、やるんだ！今までだって、そうだった

だろう!？」

重苦しい空気を吹き飛ばすため、きつい言葉でまくし立てる。

「…優也の言うとおりね。」

「そつだ、あたいたちはまだ戦える!」

「長官、俺達は戦います。許可を!」

俺の言葉に皆奮起する。

「おめえら…。よし、俺も腹くくつた!やるぞ!」

今、皆の想いは、「帝都を救う」の一つになった。

「で、疑問があるんだけど、いい?」

「何だ?」

「あの六星降魔陣、だっけ?あれってさ、別名、「パトリカーアル十字」何だよな?」

先程、米田が言っていたが、

「あいつさ、西洋を忌み嫌ってるんだよな?なんで西洋の技術を使うんだ?」

皆はつとした顔をする。

「それに、よくよく見ると、魔操機兵も、どことなく西洋の技術が使われてる。…何か変じゃないか?」

「…その詮索は後だ。それより、奴等がどこにいるかが今は重要だ。」

「ごもつともな意見だ大神さん。」

「出た！…でも反応が二つある。」

反応は、紫色と黄色を二つだった。

「紫色の方が妖力が強い。あれが天海だろう。」

確かに、首領ならば一番妖力が大きい筈。

「帝国華撃団、出撃せよ！」

「了解！！！！」

医務室

「大将、そろそろ出撃しないと。」

「もう少し待ってくれ。…先に行って待ってるよ、さくら君。」

そう言って、背を向ける。

「優也はいいのか？彼女に何か言わなくて。」

「大将がくる前に済ませた。後は、俺達がこの帝都を守るだけさ。」

変換デバイスは、あやめに頼み、預かってもらった。

「行くうぜ、大将。一世一代の大舞台に！」

この戦い、絶対に負けられない！

反応のあった場所に到着し、辺りを見渡す。

「…遅かったではないか。」

「天海じゃない!?」

そこに居たのは、天海ではなく、最後の死天王、【黒き叉丹】だった。

(天海が妖力を弱めていたのか…!?)

「貴様等に動かれても困る。ここで死んでもらう!」

言うと同時に、数え切れないほどの魔操機兵が現れた。

「皆、覚悟はいいな!?!」

大神の問いに、

「『勿論!』!」

皆の声が重なる。

人の強さを侮るな!

彼女は今、微睡みの中にいた。

…何だろう、声が聞こえる。

『…ごめんなさい。俺は貴女に、何も出来ないでいる。』

何で君が謝るの？

『本当は、貴女の側にいて、目が覚めるまで見守らなければいけない、だけど、俺は出来ないでいる。』

そんな事無い！

『…大事な物を護るため、俺達は行きます。』

待って、行かないで！

『変換デバイスは預けてあります。…また会いましょう。』

待っているだけなんて、嫌だ！私は、私は…！

「！」

目覚めてみると、薬品の匂い。どうやら、医務室のようだ。

変換デバイスを預かっているという女の人からデバイスを受け取り、武装展開する。

「これが、私の…？」

私の機体は、二対八枚の翼を持ち、複数射撃に特化したものになっていた。

「待って下さい、私も行きます！」

先程まで、私の隣で眠っていた「彼女」も来た。

「柊君、待っていて。すぐに私達も行くから！」

「まだまだ、ブラックスミス！」

漆黒の爆裂鎚で魔操機兵を消し飛ばす。

だが、後から後から出てくる魔操機兵に、囲まれてしまっていた。

「くそっ…。」

大神の無念そうな声が聞こえる。

その瞬間、

天から、魔操機兵に光の柱が突き刺さった。

同時に、

『破邪剣征 桜花放神！！』

桜色の衝撃波が敵を真一文字に切り裂いた。

「皆さん、今のうちです！」

「私達が援護するから、お願い！」

「よし、皆！蹴散らすぞ！」

「了解！！！！」

心強い援軍を得て、俺達は魔操機兵を一蹴した。

そして、気付けば又丹はいなくなっていた。

又丹の行動も気になるが、今は、復活した二人の本へ向かうことを優先した。

飛行船 翔鯨丸

「皆さん、ご迷惑おかけしました。」

さくらの謝罪に、皆暖かい言葉で迎える。

和気あいあいとした雰囲気、思わず笑みがこぼれる。

(いい表情してるぜ、大将。)

一番付き合いが長いからか、さくらが倒れた時の大神の表情は見ていられなかった。

まあ、さくらと大神のいい雰囲気が面白く無い奴も居るわけだが。

「むづー…。」

「唸るな、巴。お前だって、さくらが復活して嬉しいだろう？」

「確かに喜ばしいが、それとこれは話が別だ！」

…恋は盲目と言つが…やれやれ。

「お前の方こそ、あの二人を何とかしたらどうだ？」

巴が目を向けた先、そこでは、春香とクリスが笑顔で見えない火花を散らせていた。

「何か俺が行ったら更にややこしくなると思う。」

『肯定、【君子、危うきに近寄らず】にのっとり、静観を実行中。』

これは予想と言つより確信に近い。

「何だつて!？」

大神の驚いた声が聞こえてきた。

「どうした、大将!？」

「敵の本拠地をさくら君が教えてくれた！」

「何、何処なんだ!？」

「…日本橋、だ！」

第十一話 後編(前書き)

第十一話 後編

決戦、黒之巢会 後編

第十一話 後編

日本橋

(ここに奴らの本拠地が…。)

さくらの教えた黒之巢会の本拠地、日本橋は不気味なほど静まり返っていた。

「ここが入口、か？」

俺達の目の前には、洞窟が口を開け、俺達が入るのを待っているようだった。

ここが本拠地と言うのはどうやら当たりだろう。

「皆、今から、二手に分かれて行動する。」

「どう分けるんだ、大将？」

「この中に入り、奴らを討つ組、俺、さくら君、紅蘭、巴君…そして、優也が行く。」

「後の人達は？」

「ここで待機し、魔操機兵を食い止めてくれ。」

「了解!!」「」

さあ、決戦だ!

予想通り、洞窟内では、魔操機兵が襲いかかってきた。

魔操機兵を蹴散らし、先に進むと、結界が有るのか先に進めなくな
った。

『大神君、その結界は、魔操機兵を産み出している装置が発生源よ
！』

最高のタイミングであやめの通信。

「仕方ない、各々、三方向に分かれて、装置を破壊しよう。」

「…その必要は無いよ、大将。」

「優也？」

怪訝そうな表情でこちらを向く大神。

「大将達はここで待っていてくれ。あの装置を破壊する！行くぜ、皆
！」

機体から、六つの光を射出する。

光は人型に収束し、三つを装置に狙いを合わせる。

『…決戦兵器、解禁。』

背中の銃身を肩に担ぎ、

「発射！」

人が産み出した究極の一撃を放った。

「よし、結界が消えた！優也！」

「今そつちに行く、…！」

「どうした、優也？」

「魔操機兵だ！わんさか居やがる！」

「待ってる、今…！」

「先に行け、大将！」

「だが、優也一人では…！」

「必ずコイツを等叩きのめして追いつく！だから、行け！」

「…分かった！」

大神達の【光武】が結界の消えた先へと向かう。

「さあ、来な！片っ端から蹴散らしてやる！」

数え切れぬ程の魔操機兵に啖呵を切り、向かってくる魔操機兵達の中に、俺は飛び込んでいった。

………魔操機兵を蹴散らし、大神達の本に急いでいると、天海の声が耳に入ってきた。

「何か、何かがおかしい。俺は…俺は…。」

天海の呟きが聞こえる。予想するに、俺の疑問を大神達が突きつけた、と言っことか。

「俺は…間違っておらず！愚か者め、そのような戯れ言で俺を騙せ

ると思うてか!？」

あいつ、自分の間違いを否定しやがった!

「させるか!」

追いかけてきた残りの魔操機兵を一掃し、大神達の本へ向かう。

「貴様等だけで儂を倒そうとする事こそ無意味!儂を討つなど、千年早いわ!」

天海が大神達に吐き捨てるように言い放つ。

『…黙れ、ヒヒ爺。お前の時代はもう終わりだ。』

「何奴!？」

「優也!」

「俺だけじゃないぜ、大将。」

「隊長、お待たせしました!」

マリアを先頭に、皆がここに集結した。

「貴様等、儂を誰だと思っている!！」

天海が激昂する。

「お前が何だろうとどうでもいい!帝都の人達を苦しめた、その報いをその身で払ってもらおう!」

「…面白い、【天照】!」

天海は、自身の乗機である金色の機体を召喚し、対峙する。

「これで最後だ！皆、渾身の一撃を放つんだ！」

大神の号令と共に、皆が必殺技を放つ。

「…これが貴様等の実力、か。」

天海は動かない、やったか！？

「実に生温い！」

「そんな、馬鹿な！？」

あれだけの攻撃を喰らって、天照は傷一つ付いていなかった。

「言ったであろう、儂と戦うなど千年早いと。それで終いならば、次は儂の番じゃな！」

天照の攻撃で皆壁に叩きつけられてしまった。

「まだだ！」

「来させなどせんわ！」

立ち上がり、再び向かわんとした大神達は、天照の放った光の刃で、壁に礫にされてしまった。

「ほう、とっさに避けた者が居たか。しかし、貴様等は儂には勝てん！」

光の刃を避けた俺に言い放つ。

「一度で通用しないなら…！」
「ぬう！？」

天照に肉薄し、光刃を振り下ろす。

「無意味だと分からののか！」

天照に振り払われる。

「一度で駄目なら二度！二度で駄目なら三度！三度で駄目なら…！
何度でも、何度でもだ！」

攻撃しては吹き飛ばされるを幾度も繰り返す。

俺は諦めない！貴様が朽ちるその時まで！

「ぬうう…！」

天海に焦りの色が浮かび始める。

「何時までぼうっとしてんだ、大将！あんたなら、そんな戒め、直ぐに解けんだろう！？」

「…ああ！君に任せつきりじゃ、帝国華撃団の名折れだからな！」

大神の【光武】が力を込め、光の刃を掻き消す。

「西洋に溺れた愚か者どもごときに…！」

「天海！時代はお前を認めない！古い時代と共に退場しろ！」

両手の剣を突き刺し、腰、肘から剣を引き抜き、突き刺す。

「大神さん、私たちの力、受け取って！」

大神の光武が、さくら達の力を受け取り、光り輝く。

「【狼虎滅却 快刀乱麻】！」

大神の一撃で、天照がよろめく。

「観念しな、これで終わりだ！」

村正を展開し、振り上げる。

「き、貴様、その刀は…！」

「そうだ、お前の仕えた徳川に災いをもたらした妖刀だ！お前の部下から奪わせてもらった！」

「おのれ、貴様さえ居なければ！」
「俺が居なくても、お前は勝てない！勝てるわけがない！」

部下を見捨て、独りで戦うお前は、力を合わせらる彼等に絶対に勝てない！

「これで…終わりだ！」

天照を両断する。

「馬鹿な、この儂が…！」

天海は、両断された自身の機体と共に散った。

(俺達の…勝ちだ…)

洞窟から出て一息つく。

「終わったな、優也。」

大神が寄ってきて言う。

「ああ、これで一つの区切りになったな。とりあえず、今は休みたい。」

「休む暇なんてねえぞ。」

「!?!?」

いきなり米田が出て来たから、物凄く驚いた。

「…休む暇が無いってのは? 一体どうゆう…?」

「言葉通りだ。たった今から、帝都の復興が始まるんだぞ? 休んでなんかいられるか! とりあえず、今日から一月の間、劇の料金を無料にする!」

「何い!?!?」

無料にしたら、物凄く人が来るぞ!?! 下手したら、雑用で死んでしまっ!

「まあ、大赤字ね。」

笑ってないで、少しは反対してよ、あやめさん！

「良いじゃないか、優也！やってやるっ！」

大神の号令でやる気になる。

よし、やってやる！何でも来やがれ！

「と、その前に。皆さん、『アレ』やっちゃいましょうっ！」

さくらの呼びかけに皆集まる。

…そっぴやかなり久しぶりな気がする。

『勝利のポーズ、決めっ！』

ここにいる全員でポーズを決め、笑った。

…明日から大忙しだ。

某所

「…天海も死んだか。」

「なら、次は？」

「我々が動く時が来た。」「いつ動のかしら？」

「もうすぐだ、任せておけ。」

…悪はまだ全て居なくなっではいなかった。その時はまだ俺達は気

付けていなかった。

第十一話 後編（後書き）

作者です。この話で、黒之巢会と決着が付きます。

お付き合いいただき皆様、こんな駄目作者ですがよろしく願います。

次回ですが、一旦、コーヒブレイク的な話にしようかと思えます。

下手したら、かなりぶっこわれた話になるかもしれません。

では、またお会いしましょう。

第十二話 衝撃の聖夜（前書き）

第十二話

衝撃の聖夜

第十二話 衝撃の聖夜

黒之巢会との決戦から少し経って、帝都は活気を取り戻しつつあった。

劇の料金が無料なこともあり、帝国劇場に客足は絶えず、俺の雑用も、途切れることが無かった。

忙しいが、事件の起きない日常、それを俺は堪能していた。

しかし、事件は往々にして起きるもので、時にして十二月二四日、世間で言うクリスマススイブにそれは起きたのだった。

「うーん、この頃雑用で忙しかったから、やる事が無いと暇だな。」

「今日は、休みだからな。…確かに手持ち無沙汰ではあるな。」

昨日までがてんでこ舞いだったから、逆に休みになると体がついてこない。

「…大将は誰かとデートとか行かないの?」

なんか花組の皆さんがそわそわしてた気がする。

「今日は、やりたいことがあるんだ。」

にべもない大神の返事。

「やりたいこと?...そうか、覗きか。」

前に痛い目見たのにまだやるとは、相当の強者と見た。

「そうそう、って違う！何で覗きをしなきゃいけないんだ！」

ノリツッコミしてきた。

「外したか。じゃあ、何なんだ？」

この男が、美人揃いの花組を放っておいて何かしようとするなど、普通なら考えられない。

「…秘密。」

「そう言われると、何としても聞き出さなくなる、さあ吐くんだ！」
「駄目だ！絶対に言えない！」

頑として口を割らない大神。

「ならば、俺と勝負しよう。俺が勝ったら、聞かせてもらう！」

「…分かった。その代わり、俺が勝ったら、あの二人のどちらが好みか聞かせてもらう！」

「なん…だと…！」

あの二人のどちらが好みだと！？そんな事、答えられない！

「勝負は花札にしよう。」

そう言って花札を用意する大神。

「今日は負ける気がしない！」

「上等、俺に花札で挑んだこと、後悔させてやんぜ！」

こうして、二人の、負けられない戦いが始まった。

(す、凄い物を聞いてしまった…！)

偶然通りがかり、二人の会話を聞いてしまった巴は驚愕していた。

(大神殿の隠しているのも気になるが、優也の好みもかなり興味深い…！)

と言つのも、あの男、春香とクリスがアピールしているのに全然気付かず、見ているこちらをやきもきさせていたからである。

(これは皆で分かち合わねばなるまい！)

巴は急ぎ足で、皆を集めるため、移動し始めた。

一方、そんな事が起こっているとは全然知らない男二人は、花札に熱中していた。

「猪、貰った…！」

「甘いな、花見酒だぜ！」

「くっ、抜かった！」

…もの凄く熱中していた。

サロン

「あの二人がそんな事を…?」

「うむ、かなり緊迫した雰囲気だった。」

巴は自分が遭遇した出来事を皆に話した。

「大神さん、何を隠しているんでしょうか…?」

さくらが戸惑った様子で言う。

「それよりも!」

「大事な情報があります!」

二人が声を張り上げる。

「柊君の好みが分かるかも知れないんだよ!」

「そうです! まあ、柊さんは私を選ぶと思いますけど。」

「ふざけた事を言うわね、あなた。柊君は私を選ぶの!」

二人のテンションはかなり高かった。

「二人共落ち着いて。」

マリアが二人を宥める。

「…そういう物は、皆で確かめるものでしょ?」

…どうやら、宥めた訳ではなく、皆で行こうという事だったらしい。

「「「異議、なし!」」」

こうして、乙女達は、確認の為、彼等の所へ向かう。

その心はと言つと、

(自分と2人つきりで聖夜を過ごしたかったのに!)

…とまあ、乙女の思いは大体同じような物だった。

彼女達が行動に出る少し前、熱き戦いが大詰めを迎えていた。

「…来た、来た来た来たあー!青短、猪鹿蝶!」

「そ、そんな馬鹿な!」

「あ、危なかった…残り一文からの大逆転、観客が居れば、歴史に残る勝負になっていたな。」

手持ち十五文の三本勝負で始まり、最初は、お互い手札が悪く、探り合いだったが、運良く花見酒を出して俺が勝った。

二回目は、大神にツキがあったようで、雨四光と猪鹿蝶を喰らった。

そして、先程の勝負で、俺が合計十五文になり、辛くも勝利した。

「さあ、約束だ、聞かせてもらいましょうか?」

「…仕方ない、実は…。」

大神は、隠していた事を包み隠さず、一切合切話してくれた。

「…うわー。そういう事か。悪いね、大将。無理に聞いたりして。」

「いや、いいんだ。」

「まあ、聞いた以上、俺も協力するよ。」

大神のやろうとする事は一人ではかなり大変だ。

「いいのか？」

「任せなさいって。」

「…ありがとう、優也。」

事を実行に移すため、部屋を出て移動する。

「そう言えば、これって大将の独断？」

「いや、事前に長官とあやめさんの許可を貰ってある。大丈夫だ。」

「なら安心。…しかし何やら騒がしいな。」

しかもその騒がしさは、徐々に俺達に近付いていた。

「…なんかいやな予感。」

「奇遇だな優也。俺も同じ気分だ。」

もう、すぐ後ろまで来てる！

「大将！ここは俺が食い止める！後は頼んだ！」

「無茶だ！いくら何でも君一人では！」

「言い争ってる場合じゃない！頼む、大将！」

「…済まない、優也！」

そう言い残し、その場を離れる大神。

(頼んだぞ、大将…！)

大神に背を向け、それと対峙する。

「優也、なぜ大神殿を逃がした？」

「…言えない。」

「やっぱり、大神さんは、私達以外の女の人と！」

「えええええ！？何言ってるの！？」

凄く話が噛み合っていない。これだけ難易度の高い会話は初めてだ！

「と、とにかく！大将はデートなんか…」

「そう言って誤魔化すのが怪しいんです！さあ、話して下さい！」

(何故皆、こんな興奮してるんだ？)

その理由が、勘違いからの嫉妬とは知らない優也だった。

「通して下さい！でないとな斬ります！」

すらりと刀を抜くさくら。

ヤバイ、あの目は本気だ！

「じゃ、じゃあ、こつこつのはどう？俺と勝負して俺が負けたら、皆さんの言うことを聞く。…どうかな？」

「…悪くありませんわね」

俺の提案にスミレが興味を持つ。よし、食いついた！

「勝負はポーカーでどう？」

「…花札じゃ駄目なの？」

当然この疑問は予想済みだ。

「俺の勝負に乗ってもらうんだ、これ位我慢してもらわないと。それとも、あなた達はポーカーで勝つ自信が無いと？」

「上等じゃねえか、さっさとつちめて隊長の事洗いざらい話させてやるぜ！」

口車でポーカー勝負に引き込む。何となく、花札では勝ち目が無い気がして、やりたくなかった。

「ここじゃ場所が悪い。場所を変えましょう。」

「なら、サロンで勝負ね。」

こうして、優也は本日二回目の負けられない戦いに身を投じるのであった。

サロン

「最初はどなたから？」

「あたいが行くぜ！」

カンナがいすに座り、俺と対峙する。

「イカサマとか言われても困るから、シャッフルはそちらにお任せするよ。」

マリアにトランプを渡し、シャッフルしてもらおう。

そして、お互いの目の前に五枚のカードが配られた。

「これはいい手だな、あたいはチェンジ無し。」

「…二枚チェンジ。」

優也が手札を二枚代え、互いの役で勝負する。

「5と6のツーペアだ！」

カナナの手札

5 6 5 6 3

…何かどこかで見たとような。気のせいかな？

「…トリプルセブンス。」

優也の手札

7 7 7 4 J

勝負は俺の勝ちだった。

「くそっ、負けちゃった！」

「次は私がお相手しますわ！」

即座に席を代わり名乗りを上げるスミレ。

今必要なのは勝つ事ではなく、大神が事を完了するまでの時間を稼ぐ事！

俺は、表情は余裕綽々、内心汗だらだらで勝負を続けた。

「フルハウス！」

「悪いね、フォーエースだ。」

さくらの手札

J J 1 0 1 0 1 0

優也の手札

A A A A 5

「これで全員だよな？はあ、やっと終わった。」

たっぷり時間をかけて戦い、何とか勝利した。

「まだです！もう一度だけ、勝負して下さい！」

「…分かった。ならば、今度は【テキサス・ホールデム】てやろう。」

ルールを教え、再びさくらと対峙する。

まず、自分の持ち札となる二枚が配られた。

さくらの手札

8 6

優也の手札

J A

場の共通のカード三枚が表になる。

共通カード

7 K 9

お互い降りる気配はない。

四枚目のカードが表になる。

四枚目のカード

1 0

「っ！来た！」

色めき立つさくら。かなり強い役、多分フルハウス以上の役だろう。

(…駄目、か?)

息をつき、考える。

「…大丈夫だ優也。」

その声にその場の全員が息をのむ。

「大将！？いつからそこに？」

「ついさっきだ。優也、もう大丈夫だ。負けてもいい。全て完了した。」

俺の時間稼ぎが実を結び、大神は全て終わらせた。

しかし、負けてもいいと言われたが、ポーカー不敗の神話を持つ俺には負けるという選択肢は無かった。

「…五枚目のカードを開けてくれ。」

場にある最後のカードが表になる。

「…ショーダウン、ですね。私の役はスペードのストレートフラッシュです！」

「…これが他のカードならあなたの勝ちだった。」

「そんな！私以上の役なんて…！」

「キング・オブ・ポーカー。俺の役は、あなたと同じストレートフラッシュ。但し、ロイヤルがつく最高の役さ！」

最後のカードはスペードのQ。手札と共通のカードでロイヤルストレートフラッシュが完成していた。

…しかし、どれだけ運が良いんだ？天文学的な確率だぞ？これ。

「…私達の負けです。」

肩を落とし、しょんぼりとするさくら達。

「そうがっかりしなくていいと思うぞ。」

「どうゆう事ですか?」

「大将、任せた。」

「ああ、皆俺について来てくれ。」

怪訝そうな表情の彼女達を大神が先導する。

「ここだ、さあ入ってくれ。」

恐る恐る入るさくら達。

すると、

「「「メリークリスマス!!!」」」

そこには、たくさんのご馳走と、大神が前々から募っておいた人達が彼女達を出迎えた。

「これって…!?!」

「ああ、大将が帝都のみんなにいい思い出を作りたいってんで企画したらしい。」

大神の心意気に皆笑顔で応えている。今日は忘れられない一日になりそうだ。

「そっぴや、大将?人集めるだけなのに時間かかったね。何かトラ

ブル？」

「実はな、集める最中に綺麗な女性を見つけたんだ。」

彼女達の笑顔が凍りつく。

「た、大将？それで…？」

聞くのが非常に怖い。

「是非参加してもらおうと声をかけてたら時間がかかってね、結局断られたんだよ。」

「大神さん？その話向こうで詳しく聞かせてくださいね？」

笑顔で大神の肩に手を置き、引きずっていく乙女達。

「え、あ、ゆ、優也！助けっ…！？」

扉が閉まり、断末魔の叫びが聞こえた時、俺は思った。

いろんな意味で今日は忘れない一日になると…。

第十二話 衝撃の聖夜（後書き）

作者です。

今回、やりたい放題やって、皆様に怒られやしなやかと不安でなりません。

さらに、文中のテキサスホールデムは、完全なものではありません。

色々まだルールがあるのですが、端折ってしまいました。

読者の皆様、駄目作者でごめんなさい。

次からまた本編に戻るのですよろしくお願いいたします。

第十三話 魔手、再び（前書き）

第十三話

魔手、再び

第十三話 魔手、再び

黒之巢会との決戦から瞬く間に時は過ぎ、あっという間に年を越してしまった。

「「「明けましておめでとございます!」「」」

【花組】の皆さんが米田支配人に新年の挨拶をし、俺は和やかな雰囲気ですごしていた。

「優也、初詣はどうするんだ?」

「行くよ。」

春香とクリスに熱心に誘われたので行くしかない。

「大将は皆さんと行くんだよね?」

「ああ。」

「治にいて乱を忘れず、と言う。気をつけて欲しい。」

「…分かっている。」

そう言っただ神は去っていった。

明治神宮

明治神宮で初詣をする大神達。

人々の表情に暗さは無い。平和を謳歌している証拠だ。

しかし、俺はどうしても気を抜くことが出来なかった。

あの決戦でフレイヤが居なかった事が頭に引っかかっていた。

だから、変換デバイスを外さず、ここに来た。

「ねえ、柊君は何をお願いした？」

「…この平和が続きますようにって。」

「…まあ、柊君らしいって言えばらしいかな。」

その言い方は妙に気になる。

「良いじゃないですか、ほら、次行きましょう！」

クリスと春香に引っ張られ、あちこちつきあわされる。

まあ、たまにはいいか。

体力が限界になった頃、大神達と合流した。

「…大丈夫か？優也。」

「大丈夫な訳ない。もう限界。」

あの二人、あっちこっちに引っ張り回して休ませないから、かなり辛い。

「あれ、そう言えば巴は？」

「おかしいな、さっきまで居ただけど…?」

『楽しそうではないか。』

「…この声、まさか!」

鳥居を見上げると、そこには、【黒き叉丹】が居た。

「久しぶりだな。」

「天海を見限ったのか?」

「違うな、私が奴を操っていたのだ。」

「なら、お前を討てば終わりだ!」

武装を展開し、一気に肉薄し刃を振り下ろそうとする。

が、その刃は金の刃に受け止められ、又丹に届かなかった。

「お久しぶりね、白騎士!」

「その声、貴様がフレイヤか!」

春香を操り、彼女の望まぬ行為を繰り返した黒幕がそこにいた。

「違うわね、今の私は【フレイヤ】ではない。」

「ならば、何だ!?」

「我が名は【メシア】!」

「メシアだと…?ふざけるな!」

人を恐怖に陥れるお前が救世主など認めない、いや、認められない!

「その妄言、すぐに後悔させてやる!」

「やってみなさいな。…できるものならの話だけどね!」

そして、高速で刃と刃がぶつかる。

【フレイヤ】改め【メシア】は俺の攻撃を避け続けた。だが、徐々に避けきれなくなってきた。

「…くっ！」

俺の刃が奴の頬をかすめた。

「降伏しろ！お前一人では何度やっても無駄だ！」

武器を構え直し、メシアに言い放つ。

「…そうね、私だけでは無理ね。」

メシアは武器を下ろしたが、何故か嫌な雰囲気が出た。

「だから…『あの子』をお願いするわ！！」

「何っ！？…っ！」

『左腕直撃！』

いつの間に援軍が…？振り向き、確認して更に俺は戦慄した。

「と、巴？何故、何故お前が！？」

「…」

そこには巴が居た。しかし、その目に輝きはなく、人形のように見えた。

「更に、コイツ達も出そう。」

又丹が言い、何やら呼び出す。

呼び出された『ソイツ等』は、鋭い爪を生やし、禍々しい翼を持つ化け物だった。

「さあ、【降魔】共！存分に暴れるがいい！」

「じゃあね。」

そう言い残し、メシアと又丹は消えた。

「くそっ、巴！」

「……」

俺の声が聞こえていないのか、巴は手に持った大剣で切りかかってきた。

（仕方ない、気絶させる！）

躊躇している場合ではないと判断し、巴に刃を向ける。

しかし、彼女は今までとは比べ物にならない動きで翻弄し、攻撃が当たらない！

「……」

そして、巴が攻撃に出た。俺は全力で防御したが、瞬く間に装甲は切り裂かれ、刃は弾かれた。

「まさか、まさかこれほどとは…！」

俺の機体は傷ついていた。

左腕は武器もろとも使い物にならず、背中の決戦兵器は折られ、右手の刃も先端が無い。正に満身創痍だった。

「…」

俺の状態を観察した後、巴は消えた。

「優也、引け！このままでは…！」

「駄目だ大将！この化け物を叩かないと！」

『待たせたわね、皆！』

心待ちにしていた、この声！

上空から光武が降りてくる。皆が乗り込み、戦闘準備が完了する。

「水瀬さんとクリスは下がって！変換デバイスの無い今は引いて下さい！」

「「分かった！」」

二人がこの場から離れるのを確認し、化け物と対峙する。

（さあ、行くよ！）

満身創痍の機体に鞭打ち、戦場に身を投じた。

「…手酷くやられたな。」
「お互いに、ね。大将。」

化け物共は、尋常ではない硬さを持ち、あやめさんの援護射撃が無ければ確実に敗北していた。

しかも、勝利の代償に、光武は行動不能に陥ってしまった。

俺の機体もかなり痛めつけられた為、戦力が春香とクリスの二人だけになってしまった。

「…どうする、大将？」

「考えがある、また後で皆が居るときに話す。」

「分かった。」

こうして、俺達は完膚なきまでに叩きのめされた。

指令室

「んで、考えて？」

「ああ、俺達が負けたのは、自分達に未熟な面があると思うんだ。」

「つまり、どうすると？」

「…全員の再特訓が必要だと思う。どうだろう、皆。」

大神の提案に、春香とクリス、さくら、カナナ、マリアは賛同したが、スミレ、紅蘭、アイリスは難色を示した。

「…優也、君はどう考える？」

「確かに一理、ある。」

「なら…！」

「しかし、反対する者が居る以上、強要はできない。各々の判断に任せるべきだ。」

考えたが、これ以上の答は見つからなかった。

「…そうだな、分かった！各員の判断に任せる！」

そう言っつて、大神達は出て行った。

(…俺もできる限りやってみる。大将達も強くなつて帰ってきてくれよ。)

今以上に強くなつて再び俺等は立ち上がる。

今は、自分出来る事を精一杯やるだけだ。

第十三話 魔手、再び（後書き）

お久しぶりです。

更新に時間がかかり、読者の皆様申し訳ございません。

なるべく時間をかけずに更新していこうと思imasので、よろしく
お願いします。

今回は、多分前後編になると思います。

できる限り早く仕上げられるよう頑張ります。

第十四話 不屈の魂 前編（前書き）

第十四話

不屈の魂 前編

第十四話 不屈の魂 前編

「ふっ…はあっ！」

大神達が特訓の為に帝都を離れてから二週間が経った。俺は、損傷した機体でも満足に戦う為に、唯一無事な右腕を中心にした動きを試していた。

(まだ動きが荒い、こんなものでは『奴ら』は倒せない…！)

俺は、目前にメシアや叉丹、巴が居ると仮定し、特訓していた。

「駄目だな。やっぱり一人じゃ張り合いがない。」

クリスも春香も特訓の為此処には居ない。せめて誰か組み手出来る相手が居れば、と思わずにはいらなかった。

「ふう、少し疲れた。休憩しよう、プロト。」

『了解。…最近根を詰めすぎている、若干の修正を提案する。』

休憩の為、食堂に向かう途中、プロトにくぎを差された。

「…分かってる。だけど、限界を超えるには『地獄』を見るしかない。…まだ不十分なんだ。」

『納得。ならば、その地獄をこちらで生成した。確認を。』

俺の理由に納得したプロトが特訓プランを提示してきた。…どんなのだ？

朝三時、起床

朝三時半、ランニング(100km)

朝四時、筋トレ(各部それぞれ一万回)

…

最初から無理だ。

『地獄を見なければいけないと言ったが？』

「そうだけども、限度があるだろ？」

流石にこれはとかプロトと言いつつ合ってる内に、遠くから、スミレとあやめの深刻そうな会話が聞こえてきた。

「…資…がない…しいの。」

「本…では…神…は？」遠くで会話しているため、全ては聞き取れない。

「私が…って…しますわ。」

「…それしか…いのね…がい。」

会話が終わったようで、スミレは外出するようだ。

「気が変わったよ、プロト。外練り歩こう。」

『…了解。』

スミレが外出するのを見て、俺もどうしても外に行きたくなったのだ。

さあ、練り歩くぞ！

外を練り歩き、津々浦々興味を持った場所をめぐる。不謹慎だが、こつこつという気休めも必要だと言いつつおぼろげにしておく。

「あ、優也つち?」

後ろから見知った声。

「優也つち言うな、総一。」

「もー。堅物だなあ、優也つちは。」

話聞けよ。

「まあまあ、此処で会ったのも何かの縁、ゆっくり話そうよ。」

「…まあ、いいだろう。」

話し相手がプロト以外居ないからちようどいい。

「ふーん。色々あったんだ。」

「女の考えは分らん。」

話、と言っても、俺達の戦いを話す訳にもいかない。しかし、クリスと春香の喧嘩、花組との交流など、話題は尽きない。

「それはそうと、『あの人達』は大丈夫かな?」

「…あの人達?」

「『帝国華撃団』の皆さん。こつこつとやられたらしいから、心配

なんだ。」

「きつと大丈夫だ。必ず、今までより強くなって、俺達を助けられる。」

こう言っているのは、俺自身が願っているからなのかもしれない。

「そうだね。なら僕も君に話さなければならぬことがある。」

「…何だ？」

深刻な顔の総一を見て、聞かないわけにはいかないことを悟った。

「実はね…、」

「そうか、お前が、な。」

総一の話した内容、それは、帝国華撃団のバックアップを担う集団に属し、ずっと俺達の戦いを見ていたと言うのだ。

「あんまり驚かないね、優也っち。」

心外だな、驚いているさ。ただ、大神達の行為がぶっ飛びすぎているから、反応が鈍いだけだ。

「とにかく、僕は帝国華撃団、いや、君に興味を持ったんだ。」

「…何故？」

「もつと言つと、君の『機体』の秘密が知りたかつたんだ。今ある兵器を軽く凌駕する技術、能力、汎用性。僕も創ってみたくなつたんだ。」

気持ちには十分理解できる。他を圧倒する物があれば人は心奪われてしまうものだ。

「…総一。俺はお前にこの機体の情報は教えられない。」

「そうだね。分かってるよ。」

「でもな、『自分で作れば』情報なんて、必要ないよな?」

詭弁だが、必要ならば自ら創ればいい。

「…僕に…できるかな…?」

「『諦める者に道は無い』、だ。ただ、やるだけさ。」

ちなみに諦める云々は、俺の造語だ。

「…ありがとう。僕もやってみるよ。今は無理でも、いつか、いつかきつと完成させる。」

「その意気だ。」

やる気の総一はさっさと居なくなった。

(さて、随分サボってしまったな。戻るか。)

総一がいつか完成させることを願い、劇場に戻る。

戻ってみると何やら慌ただしい。

「紅蘭、何かトラブル?」

ちよつど近くにいた紅蘭に尋ねる。

「柊はん、大変や！実は…！」

指令室

「米田さん！」

「柊か…。」

紅蘭から衝撃の情報を聞いた後、米田に詰め寄った。

「本当なんですか？巴が、俺に挑戦状を叩きつけたって…？」

「ああ、これだ。」

米田が差し出した手紙を受け取り、内容を読む。

”天海との戦いの跡地で待つ”とだけ書いてあった。

「…米田さん、行きます。」

「無茶だ、お前の機体は…！」

「村正にブラックスミス、折れているとは言え、刃もあります。十分です。」

「どうしても、行くのか？」

米田が俺に確認する。

「…俺『達』はまだやるべきことがある。…行きます。」

背を向け、指令室を後にする。

「死ぬなよ…柀…！」

黒乃巢会本部跡地

「来たぞ。いるなら出てこい。」

指定された場所に転移し、『奴ら』を呼ぶ。

「…」

虚ろな顔の巴と、

「流石は白騎士。呼べば必ず来るのね。」

薄ら笑いを浮かべたメシアが現れた。

「御託はいい。早く始めよう。」

村正を展開し、突きつける。

「そうね、じゃあ、お願い。」

「…。」

いつの間にか、右腕に変換デバイスはつけていた巴が武装展開する。

「紛い物の刃で俺の魂は砕けない。…行くぞ！」
「…。」

巴の大剣と優也の村正が激突し火花を散らす。

斯くして、何度となく稽古で刃を合わせた二人が今、その命を賭けてぶつかり合う！

「…『天下無双剣』…」
「甘い！」

巴の必殺技を見切り、体制を整える。特訓の成果か、今まで以上に体が動く！これなら行ける！

「『ブラックスミス』！お前の爆風見せてやれ！」

漆黒の爆裂槌を呼び、巴に叩きつける。

しかし、

「…『百林牌』…」
「何っ!?!」

巴の拳を炎が纏い、爆風を掻き消す。更に、

「『スネグーラチカ』。」
「…!」

右肩に砲身が現れ、絶氷の弾丸を放つ。

（…まさか…今の巴は…「花組」全ての必殺技を…扱えるのか…っ
！）

今まで俺達の危機を幾度も救った技が、恐るべき一撃として俺を襲う。

「だが、まだだ！」

村正で巴の四肢の装甲を切り裂く。

「『イリス・マリオネット』。」

しかし、即座にアイリスの必殺技で回復される。

「そろそろ諦めたら？」

高みの見物と洒落込むメシアが嘲笑と共に言う。

「諦める訳無いだろ…！俺の魂は砕けない。戦える限り、何度でも立ち上がる！」

刃を手にし、巴に突っ込む。

「『チビロボ』。」

無数の機械が俺を囲む。

「…っ、邪魔だ！」

「『破邪剣征 桜花放神』。」

巴が詰めの一撃を放つ。チビロボを振り払えず、身動きの出来ない俺に逃れられない『死』が迫る。

「チェックメイト、よ。白騎士。」

桜花放神を見ながら、メシアが呟く。

そして、凄まじい爆音が辺りに鳴り響いた。

(駄目だ、逃げられない！此処までなのか…！？)

迫り来る衝撃に思わず目をつぶる。

そして、凄まじい爆音が響く。…しかしおかしい、いつまでまったく痛みが来ない。

恐る恐る目を開けると、

「ふっ、貴様が誰かに倒されては困るのでな。」

「…『黒騎士』！」

そこには、収穫者を発動させ、桜花放神を防いだ黒騎士がいた。

「しかし、予想以上の威力だ。我が機体も貴様と似たり寄ったりの状態にされてしまった。」

確かに、黒騎士の機体も、あちこちが損傷していた。

「黒騎士。行けるか？」

「…武器が無い。」

「なら、ブラックスミスを使え。」

「ふっ、『白騎士』が『ブラックスミス』とは、なかなかのジョークだな。」

軽口を叩きながら、漆黒槌を受け取る黒騎士。

「一人増えた所で何か変わるとでも？」

メシアの笑いは消えない。

「…見せてやるうぜ、黒騎士。『純白』と『漆黒』の『コンビネーション』を！」

「無論！我等が連携、見せつけてくれる！」

再び最強の敵である巴とメシアに向き合う。

騎士の共演、目にも見せる！

左右から挟み込み、即席とは思えぬ連携で攻める。

「黒騎士、上を頼む！はあっ！」

「受けよ、漆黒槌！」

白と黒のコンビネーションに巴が後退する。

「行ける！」

「…と思ったでしょ？」

「『胡蝶の舞』。」

肉迫していた俺達をあざ笑うかのように、巴はいともたやすく俺達を返り討ちにした。

「さあ、諦めなさいな。アナタ達は頑張った。だから安心して死になさい。」

まるで聖母のような笑みを浮かべ、メシアが告げる。

まだだ…まだ死ぬるかよ…！俺は、いや、俺達は…諦めない…！

「っおおお…！！！」

「ぬっっっっ！！！！！」

俺と黒騎士を純白と漆黒の光が包む。

「…まさか、あなた達の機体…！」

（黒騎士！）

（うむ、今こそ！）

俺と黒騎士の機体は兄弟機だ。お互いにプロテクトがかかり、本来の力は封印されていた。

だが、今、その最後の封印から解放され、真の力を発揮する！

光が収まった後、

二人の姿はそこにはなかった。

「どこに、どこに行った!？」

メシアが探す。

『…待たせたな。本当の俺達をお見せしよう。』

メシアは声がした方向を向く。そこには、

「さあ、ショータイムだ！」

左腕に再生した複合兵装を装備し、背中に二門の決戦兵器を搭載し、宙を舞う優也と、

「我等が真の実力、しかと見よ！」

漆黒の波動纏う大鎌を携えし、悪魔のごとき翼を持つ黒騎士の姿があった。

「…行くぞ!！」

第十四話 不屈の魂 後編（前書き）

第十四話

不屈の魂 後編

第十四話 不屈の魂 後編

「……！」

巴が優也に迫り、大剣を振り下ろす。

しかしその軌道は虚しく空を切るのみだった。

「ご機嫌だな、黒騎士！」

「フツ、お互いにな！」

巴の怒涛の攻めを容易くあしらい、黒騎士と軽口を叩き合う。

「じゃあ、一気に行きますか！」

左腕の刃を折りたたみ、現れた銃身から高出力の弾丸を連射する。

「うむ、決めるに任せて！」

射撃に退路を削られた巴に漆黒の大鎌を振り下ろす。

「……！」

彼我の戦力差に巴の動きが鈍った。

「今なら！黒騎士、頼む！」

「任せておけ！」

黒騎士に援護を頼み、巴に接近する。

「！」

此方の接近に気付いた巴が迎撃の態勢をとる。

しかし、絶妙のタイミングで視界に現れた黒騎士に一瞬気を取られた。

「！？」

「流石黒騎士。いい仕事してくれる！」

再び刃を展開し、刃の腹で巴を思い切りぶっ飛ばした。

ぶっ飛んだ巴は、壁に激突し、動かなくなった。

「さあ、頼みの巴は退場したぞ。メシア、お前は何の為にこんな事をする！？」

ずっと気になっていた、奴の『真の目的』を問い質す。

「ふふつ。私の目的はただ一つ。」

高台から降り、メシアが刃を展開する。

「【二度と争いの無い世界を創ること】――！」

高らかに宣言し、優也の刃とメシアの刃が激突し、激しく火花を散らす。

「争いの無い未来の為に、今この時代に生きている太正の人々を脅

かすのか!？」

それでは、例え未来に平和が来ようと誰も納得しない!

「あなたも知っているでしょう? 私達の先祖が引き起こした、忌まわしき『第三次世界大戦』を!」

「それがお前のやることに何の関係がある!」

『第三次世界大戦』: それは、西暦2315年から始まり、百年以上続いた、人類の引き起こせし最悪の戦争だ。

「あの戦いで上の奴らは核の使用を躊躇わなかった! おかげで、世界の八割以上の大地が死んだわ!」

「だが、皆で力を合わせて再生させた!」

「機械だらけの『偽りの大地』にね!」

言い争い、刃をぶつけ合う。

「このまま放っておけば、また必ず戦争は起きる! あなたの両親が『戦争を終わらせる為』完成させ、あなたが携わったこの機体達で!」

「...っ!」

「だから、その前に叩く! 第三次世界大戦やこの機体達に携わる人達の【先祖】を消す! それが私の願い!」

メシアの刃に押し切られ、俺は壁に叩きつけられる。

メシアの言葉、その中に俺は一片の『真実』を感じ取ってしまった。

(確かに、人は幾度も繰り返してきた。俺は、『俺達』は間違っ

いるのか…?)

迷いが生まれ、動きが鈍る。

「…間違えるな、友よ。」

「…黒騎士？」

「【間違えぬ人間】など何処にも居ない。」

「…！」

「大切なのは、【間違えたならば正しき答を目指す】ということだ。

…違うか？」

「違うないさ。…ありがとう、黒騎士。」

「ならばメシア如き、さっさと一蹴せよ！」

「任せろ…！」

黒騎士の言葉に答を見だし、迷いを振り切る。

「メシア！確かにお前の言わんとすることは正しい！でも、させない！」

「なら、黙って未来の人々に死ねと言うの？」

「手を取り合うんだ！人々が互いに手を取り、協力しあえば戦いなんて起きやしない！」

「出来る訳がない！」

「出来る、いや、やってみせる！」

「戯れ言を！」

より一層激しく刃がぶつかる。

幾度かぶつかり合い、優也が少しよろけた。

「所詮、あなたの答は夢幻に過ぎないのよ…！」

勝利を確信し、メシアが刃を振るう。

「『人の心に、不可能なんてない!!』」

優也の声に呼応するかのようになり、優也の機体が光を発し、辺り一帯に広がった。

「何、何なのこの光は!？」

光に恐ろしさはない。それどころか、人を包み込む『優しさ』すら感じさせた。

「『人の心』が起こした、奇跡だとも言うの!?!？」

光に気圧されたか、メシアはこの場から消えた。

「…その機体にそんな機能があったのか？」

戦闘の終了を確認し、武装解除した優也に黒騎士が尋ねる。

「いや、多分、どんな機体でも出せるはずだ。あれは機能と言うより、心の具現化みたいなものだからな。」

言い終わった後、動かなくなった巴を確認する。

「…生きてるか？」

「当たり前だ、手加減したんだから。」

とりあえずデバイスを解除し、起こしてみる。

「…。」

が、まだメシアの支配下にいるらしく、攻撃態勢をとった。

やはり呼びかけて我を取り戻させるしかない！

「巴、目を覚ませ！お前は俺達の仲間だろう！」

「…。」

「皆心配してる！戻ってこい！」

「…。」

とまあ、延々呼びかけてみたが全く反応が無い。

俺も我慢の限界が近づいていた。

「くそっ、おい巴、いい加減起きろ！さっさと帰って大将達に会いに行くぞ！」

「…。」

「…あくまで無視か。いいだろう。」

できればやりたくなかった最終手段だが、この際仕方がない。

「…下がっている、黒騎士。」

「う、うむ。」

黒騎士も俺の覚悟を悟ったか、素直に下がった。

「…ふざけるなよ、このまな板娘！！」

「…！」

「ああ。」

「優也、頼みがある。」

「何？」

「私も力をつけたい。特訓の相手をしてくれ！」

やる気満々の表情で巴が頼んできた。

勿論、

「任せる。丁度こつちも相手が欲しかったからな。二人でビシバシいくからな。」

「うむ、頼む！…？二人？」

「ああ、二人。」

「我々がきつちりと鍛えよう。」

巴の疑問に黒騎士が答えた。

「え？何故お前まで？」

「どうせなら、戦力は多い方がいいから。それに、黒騎士の方から入れてくれって来し。」

戦いが終わった後、よくよく話し合い出した結論だ。

米田やあやめの許可はすぐにでた。

「何となく納得いかんが…、ともかく、宜しく頼む！」

「ああ、残り一週間、地獄をみてもらう！」

操られた巴を元に戻し、黒騎士と言う新たな仲間も得た。

俺達は、特訓を再開し、一週間後に戻ってくる大神達を待つのであった。

第十四話 不屈の魂 後編（後書き）

…お久しぶりです。

早く更新すると言いながらこのていたらしく、誠に申し訳ありません。

しかも、内容も読みづらい。駄目作者をお許し下さい。

今回は大神達を活躍させようと思います。

また遅くなるかもしれませんが、よろしく願います。

第十五話 神なる武（前書き）

第十五話

神なる武

第十五話 神なる武

(やつと戻ってきた、みんな、待っているだろうな。)

修行を終え、帝都に戻ってきた大神は一刻も早く劇場に戻ろうと足を早めていた。

「隊長、今お戻りでしたか。」

「ああ、マリア。久しぶりだな。」

劇場の前でマリアと再開し、二人で劇場に入った。

「あ、大神さん、マリアさん、お帰りなさい！」

「久しぶりだな、隊長、マリア！」

劇場に入ると、先に戻っていたさくらとカンナが二人を出迎えた。

「ああ、ただいま、二人共。ところで…」

大神がここにはいない他の皆がどうしているかを聞こうとしたその時、

『 遅い！ 』

『 もっと周囲に気を配れ！ 』

『 分かっている、もう一度頼む！ 』

『 『 その意気だ、行くぞ！！ 』 』

中庭から、模擬戦闘の気配。

「…誰が模擬戦闘を？」

「…聞くより見た方がいいな、行こう、マリア。」

大神達は中庭に足を向けた。

中庭

「隙あり！」

「…っ！優也、黒騎士、少しは手加減をだな…！」

「言っただって仕方ないだろ？一週間で強くならなきゃいけないから、これ位我慢しないと。」

「しかし、各段に動きは良くなっている。一週間前とは大違いだ。」

巴が復帰してから一週間、他の人と違い、巴が特訓する時間があまりなかった為、俺と黒騎士の二人を相手に延々模擬戦闘を言うと言う『地獄』をみてもらった。

確かに、最初に比べれば見違えるほど成長した。二人がかりでイジメ、もとい、鍛えたかいはあるというものだ。

と、思いを巡らせていると、

「優也！」

後ろから声が。

「大将、戻ってたのか。久しぶり。」

「…挨拶は後だ。色々聞きたいことがあるんだが。」

聞くまでもなく、黒騎士や巴の事だろう。

「分かってる、全部話すから。」

大神達が不在の間に起きた出来事を洗いざらい全て話すのであった。

「なる程、黒騎士が味方になり、優也の機体は更なる力を得た、か。」

話を聞き終わり、大神は取りあえずは納得した。

「…問題は光武、か…。」

大神の懸念に皆俯く。

確かに、未だに光武の復活の目処は立っていない。

現時点で動けるのは、俺と黒騎士、春香、クリスだけだ。

光武の復活、又は新たな機体が必要だった。

「…そう言えば、紅蘭やスミレさんが何かしら動いていたな。」

「優也、それは本当なのか？」

大神が俺に確認をとろうとした瞬間、けたたましい警報が鳴った。

「くっ、こんな時に！」

「とにかく、指令室に！」

俺達は一目散に指令室に駆け出した。

指令室

「…敵は新宿、か…。」

「大神さん達が動けない以上、私達で何とかしないと。」

指令室に揃った俺、黒騎士、春香、クリスで頷き、米田を見る。

「…俺達も動ければ…」

「今は俺達に任せてくれ、長官、行きます！」

「頼んだぞ！」

指令室を後にし、新宿に向かう。

大神達が戦えなくても、心はいつも共にある！！

「…今ほど力を欲したことはない…っ！」

自分達が戦えず、未来から来た優也達に任せるしかない現状に大神は歯噛みする。

「光武が無いからと、帝都を脅かす奴らを彼等に任せて、何が【帝
国華撃団】だ！」

今地団駄を踏んでも意味はない。分かっているても苛立ちを募る。

「落ち着け、大神。」

「しかし、長官！」

「なあに、心配すんな！黙って、地下に行つてこい！」

米田の言葉に引っかけかりを覚えたが、大神は従い地下に向かうのであつた。

新宿

「水瀬さん、後ろ！」

「ありがとう、柊君！」

春香の背後に迫っていた【降魔】を左腕の刃で両断し、油断なく辺りを見渡す。

「流石に四人じゃ分が悪いか？」

「どうした、友よ！らしくもない！」

「…だったな！」

そうだ、今は俺達が頑張るんだ！

しかし、数の差はいかんともしがたく、次第に旗色も悪くなる。

「！しまった!？」

刃で切った降魔が俺にしがみつき、動きが止まった。

「柊さん!?!」

「そんな!?!」

動きの止まった俺を絶好の的と見た降魔が鋭い爪を振り上げる。

(まだ、まだこんな所で終われないのに…!)

呆然と爪の軌道を見る。

しかし、横からきた斬撃が降魔を両断し、俺は助けられた。

『油断大敵だな、優也。』

「大将…!?それに、他の皆さんも!【光武】が直ったの!?!」

「いや、この機体は【光武】じゃない。」

確かに、光武とは形状が違う。

「この機体は【神武】!俺達の新たな力!」

「神…武…!」

大神達は手に入れたのだ。新たな『剣』を。

大切な物すべてを護れる素晴らしき力を。

「後は俺達に任せてくれ。遅れた分、思いつきり暴れてやるさ!」

「…羽目外し過ぎてやりすぎるなよ、大将!」

「勿論だ!」

降魔との戦いに消耗していた俺達四人は退き、代わりに、大神達が舞い踊る。

大神を始め、皆見違えるような動きの良さを見せる。

瞬く間に降魔を殲滅し、又丹の配下であろう赤い大型の機体を取り囲んでいた。

「行かなくて良いの？ 柊君？」

「…今の俺達では足手まといです。見守りましょう。」

本音では今すぐにも行つて共に戦いたい。

しかし、想像を絶する数の降魔との戦いで消耗した俺達にその余裕はない。

俺達に出来る事は、大神達の戦いを見守る事だった。

「？何故に大将は土下座なんてしているんだ？」

と言うより、あの機体で土下座出来た方が驚きだが。

（！なる程、偽りの降伏で油断させようって訳か。）

土下座の効果はテキメンだったようで、赤い機体は若干出力が落ちたように見えた。

無論、その隙を見逃す彼等ではない。

取り囲み、一斉に必殺技を叩き込む。

この攻撃に耐えられず、赤い機体は爆散した。

神武はその能力を余すことなく発揮して見せた。

格納庫

「…これから、よろしくな、神武サン。」

戦いを終え、誰もいない格納庫で新たな戦友に挨拶をする。

「…それから、今まで本当にありがとう、光武サン。」

あの正月の言う戦いで敗れ、未だ傷付いたままの光武に礼を言う。

「俺達の戦いはまだ続く。全部終わるその時まで、光武サン、見守つてくれ。」

返事がないのは分かっている。

全て、俺の『自己満足』だ。しかし、光武に言った言葉、想いには嘘偽りは一切無い。

『優也、皆待つてる、来てくれ。』

「…大将が呼んでるから行くよ。また、一緒に戦おうな。」

そう言い残し、優也は格納庫を後にする。

【…分かっているよ。君の気持ち、想い、全部知っているから…】

誰もいない格納庫に静かに「声」が響く。

【きつと…きつと、いつかまた…】

そうして「声」は消えた。新たな力を得、復活した【帝国華撃団】。しかし、この格納庫の「声」は終ぞ、誰も知り得なかった。

第十五話 神なる武（後書き）

作者です。

最近猛暑が続きます。皆様、こまめな水分補給を行い、熱中症に十分お気をつけ下さい。

最近バイトが決まりました、更新が遅くなりがちになると思います。

でも、出来る限り早い更新を心がけていきます。

ではまたお会いしましょう。

第十六話 あやめ(前書き)

第十六話 あやめ

第十六話 あやめ

「…赤い月、か。何か不吉めいた予感がするな。」

窓から覗く、美しくも禍々しい赤い月を見上げ、物思いにふける。

最近あやめに元気がない。聞けば何やら夢見が悪いとのこと。

赤い月と言い、あやめと言い、何かと不吉な予感がした。

「…まあ、杞憂だろう。…寝るか。」

後で思えば、この判断がいかにか致命的か、今は知る由も無かった。

翌日

「…？どうした、大将。難しい顔して。」

「ああ、優也。…あやめさんの事だな。」

大神が言うには、万が一、この劇場に敵が侵入した場合の備えを検討している最中に、上の空になったのだとか。

「色々あるんじゃない？大将みたく単純じゃないんだから。」

「失礼だぞ。…そうだといいが、な。」

やはり、言い表せぬ不安が拭い去れなかった。

この後、米田の所へ向かうと言う大神と別れ、一旦は雑用に集中する事にした。

それからしばらく経って、【花組】隊員達が深刻な表情で俺の所へやって来た。

彼女達曰わく、大神が何か隠しているが、教えてくれない、大神から聞き出して欲しい、とのこと。

正直、無理だとは思ったが、言ったら大変なことになりそうなのでとりあえず聞くだけ聞いてみることにした。

「大将、少しいい？」

「…何だい？」

「花組の皆さんに隠す事って…何？」

仲間にも言えない何かがあるのか？

「…済まない。今は言えない。…必ず皆に後で話す。」
「…了解。」

大神も苦しいのだろう。答える表情が沈痛そのものだった。ならば今は何も聞かないのが一番。

やりとりを終えた瞬間、降魔襲来の警報が。

「大将！」

「ああ！」

大神と共に地下へと急ぐ。

「！？靴ひもが！優也、先に行つてくれ！」

「急げよ、大将！」

急に靴ひもがほどけた大神を残し、先を急ぐ。

しかし、少し行つた所で一目散に引き返した。

「あやめさん！？あんた何やってんだ！」

何と、あやめが大神の首を力一杯に絞めているではないか！

しかも、どこにそんな力があるのか、大神が抵抗してもびくともしない。

少し経つて、あやめははつとした様子で大神を解放した。

「平気か大将？」

「大丈夫だ。さあ優也、行け！」

半ば背中を押されるように駆け出す。そして、大神とあやめの会話が少しだけ耳に入った。

劇場前

劇場の外は辺り一帯が猛吹雪で視界が悪い。

その上、延々降魔を生み出す魔来器に手を焼かされた。

「どうだ、これがこの【鹿】様の実力だ。さあひれ伏せ！泣いて命乞いをしろ！」

前の赤い機体と似通った青い機体の奴の言葉にカチンと来たので思わず言い返してしまった。

「うるさい！大したことない癖にでかい口叩くな！」

「ち、ちよつと柊君！？まずいよ！」

「！？しまったつい口が！」

素晴らしすぎるミスに泣きたくなった。

「い、言いやがったな！クッソー！許さんぞ貴様！」

「…いや、出力が落ちてる。お手柄だな、優也。」

一応結果オーライだが、次回からは細心の注意を心がけるよう自分に言い聞かせた。

この後、出力が低下した敵機は、一斉攻撃をくらい、呆気なく散った。

同時に吹雪が止み、辺りが見えるようになる。

「！？あれは！」

大神の声に反応し、皆一斉に屋根の上を見る。

「又丹！それにあやめさん！？」

其処にいたのは、短剣と鏡と宝玉を手にした又丹と又丹に捕らわれたあやめがいた。

「大神君！構わず撃ちなさい！」

「しかし！」

「このまま又丹に渡す訳にはいかないの！」

苦悶の表情を浮かべたまま大神は銃を構えた。

しかし、

「やっぱり、出来ません！」

そう言って銃を下ろしてしまった。

「…自分を、裏切らない大神君で、いてね。」

大神が撃てない事も分かっていたのか、あやめは微かに微笑んだ。

「やらせるかつ！」

即座に刃を展開し、あやめを奪還すべく又丹に突撃する。

しかし、不可視の障壁に阻まれ、近付けない。

「貴様等は黙って見ているがいい。最強の降魔の復活を！」

そう言って又丹は、あやめの唇を奪った。

その瞬間、あやめの姿が激変し、黒い翼の禍々しき姿になってしまった。

「ああ、又丹様…お会い出来るこの瞬間を一日千秋の思いで待ちましたわ…。」

「私もだ。最強の降魔、『殺女』よ！」

又丹は、殺女と呼んだ『ソイツ』を抱きしめた。

「…殺女とか言ったな。お前が何者かはどうでもいい。…あやめさんを返せ！」

俺の怒りに少しも怯まず、こう言い放った。

「あやめ？そんな奴知らないわ。」

「な、何!？」

「又丹様、行きましょう？」

「フツ、そう言うことだ。フハハハハ!!」

又丹の高笑いを残し、奴等は消えた。

俺達に衝撃を与えて…。

その後、一時帰還したが、皆表情は暗い。

つい先ほどまでここにいたあやめがあんな事になったのだ、明るく振る舞えと言う方が酷だろう。

「…あやめ殿は皆に慕われていたのだな。」
「だろうな。俺達は付き合いが長くないが、他はそうもいかないだろう。」

地下で黒騎士と話し合う。

大神や花組の方々、クリス、春香もショックが大きい。

帰還してすぐ、大神は隠していた事を皆に話してくれた。あやめの持っていた三つの物が『魔神器』と言う事、魔神器が降魔を封じる鍵だと言う事、そして、

「さくらの親父さんが命を懸けて魔神器を使い降魔を封じた、か。」
「更にはその魔神器がこの国を滅ぼす鍵になるそうだ。…全く厄介な。」

話し合う合間にもあやめとのやり取りが脳裏をよぎる。

なんだかんだ言ってもやはり哀しい。

「…プロト。必ずあやめさんを連れ戻そう。」
『同意。皆同意見の筈。』

例え可能性が限り無く低くても、必ず。

決意した瞬間、警報が。

「…行くぞ！」

銀座

夜の銀座は不気味なほど静まり返っていた。

そこに佇む一つの陰。

漆黒の翼を揺らし、妖艶な雰囲気醸し出す魔性の美女。

「殺女」は彼等が来るのを待っていた。

「…来たわね。」

「…あやめさん！」

大神の声が響く。

「あやめさん、目を覚まして下さい！あなたは操られているんだ！」

「未だにそんな事を言うなんて…甘い！」

大神の悲痛な呼びかけも実らず、殺女が翼を翻し、大神を襲う。

「させるかよ！」

刃を展開し、大神の『神武』の前で殺女を迎え撃つ。

水平に殺女を切り裂くように刃を振り抜く。

だがしかし、刃に手応えがない。

「遅い遅い。欠伸が出るわ。」

「なっ…!?!」

殺女は刃の上に立ち、嘲笑を浮かべていた。

「やっぱりあなた達はこの子達で十分ね。」

言うが早いか、降魔と紫色の機体が出現した。

「この子達をあしらえたら、また遊んであげるわ。」

はっきりとした余裕を見せつけ、殺女は消えた。

「…あやめさん!」

「大将、今は目の前に集中しろ!」

「…ああ、分かっている!」

改めて体制を整え、俺達は降魔との闘いに挑んだ。

やはりショックが抜けきらないか、皆の動きにいつもの『キレイ』がない。

しかし、何とか降魔を仕留め、残るは紫色の機体一体となった。

「どいつもこいつも役立たずばかり!まったくこの『蝶』が又丹様に叱られるじゃない!」

口調は女だが声はまるきし男の声。

「ちょっとあんた達！やっぱり又丹様とお似合いなのは殺女なんかよりこの蝶だと思わない！？」

散々愚痴った後、呆れることにこちらに質問してきた。

…今戦闘中、だよな？

「…お前、男なんだろう？」

やはりどこか呆気にとられた大神が言う。

「何よ！愛の形は無限なのよ！許せないわ、あんたたち！」

怒りに狂い出力が落ちる。チャンスだ！

「愛の形は無限、か…。」

「深いですね…。」

おーい春香さんにクリスマスさんよ。感心してないでちゃんと戦おうや。

「これで、終わりだ！」

大神の太刀が蝶の機体を両断する。

「ああっ、又丹様あ…！」

蝶は最後まで愛する又丹の名を呼び、散った。

戦闘が終わった直後、朝日が俺達を照らす。

「見てや、朝や！明けない夜は無いんや！」

紅蘭が弾んだ声で言う。

しかし、

「…あれは…！」

大神の見ている方には、禍々しい『城』があった。

斯くして、最後の戦いが幕を開ける。

最後に立っているのは果たして…

第十六話 あやめ（後書き）

まず最初に謝罪します。申し訳御座いません。

本当にお久しぶりです。

更新に2ヶ月近くかかってしまいました。

読者の皆様、お待たせして申し訳御座いません。

さて内容ですが、自分で言うのも何ですが、速いです。

本当に文才の無い駄目作者で申し訳御座いません。

さて、次回本当の最終決戦です。

べしうぞん、もうしばらくお付き合いたさい。

第十七話 最後の戦（前書き）

第十七話

最後の戦

第十七話 最後の戦

俺達の前に現れた禍々しき『城』。

それをみていた俺達を嘲笑うかのごとく、何処からか又丹の声が聞こえてきた。

『見よ、これぞ【聖魔城】！丁度良い、貴様等に良いものを見せてやる。』

そう言うと、その聖魔城から、巨大な砲台が姿を見せた。

『贈り物だ、受け取れ！』

そして、その砲台から、一筋の光が放たれた。

その光は、雲を貫き、山を削り取り、着弾したその一帯を蒸発させた。

『安心しろ、あの一帯には何もない。…さあ、まだ抗うと云うのなら、足掻いてみるのだな。』

言うだけ言って、又丹の声は消えた。

「…大将。」

「一端戻るぞ。整備と補給を済ませる。」

そう言った大神の顔は覚悟を決めたように見えた。

指令室

「…言うべき言葉が見つからない。…駄目な男だな、俺は。」

戻ってきた俺達を見て、米田は自嘲気味に呟いた。

「いいえ、長官。俺達はいつでも長官を頼りにしてました。何か大事にならないように、色々奔走していたこと、感謝しています。」

「大神…。」

「老け込むには速いさ。まだ俺達はやるべき事があるだろう？」

「やるべき事？何だ柊？」

眉をひそめて尋ねた米田に、全員が思っているであろう決意を、確信を持って告げる。

「又丹と降魔をぶっ潰して、あやめさんを連れ戻す。…無論、誰一人死ぬことなく！」

「…そうか。ならば何も言わん。…こつちもやる事が出来た。」

やることとは何か、聞いてみたかったが、米田の背中への気迫に、聞くことを躊躇った。

だから、変わりにこう言うことにした。

「…米田さんよ。」

「…何だ。」

「…全部、全部終わったら…盛大に宴会しよう。その時は…何時までも付き合っから。」

俺も彼等も、みんなが無事であることはほぼあり得ない事だと理解していた。

だが、だからこそ、言いたかった。大神や花組の皆、あやめに米田、裏方の皆さんも巻き込んで騒ぐ約束をしたかった。

…それが叶わない願いだとしても。

「…ああ、三日三晩続く大宴会にしよう。」

米田が応じ確かに宴会をする約束をした。

「…行くぞ。必ず、必ず皆で戻るぞ！」

大神の号令に【帝国華撃団】が力強く応える。

「『了解！！』」

…これが最後だ。俺も総てに決着を着ける！

翔鯨丸内

「優也…。」

「…どうした、大将。」

決戦に向け、準備を進めていると、顔中真っ赤になった大神が来た。

「いや、その、何というか…。」

「何だい、焦れたい。」

「実は、巴君に告白されて…。」

その言葉に、不覚にも大笑いしてしまった。

こんなタイミングで告白する巴と、告白で真っ赤になるウブな大神の両方に笑えた。

「失礼だぞ、優也…！」

気分を害した顔で大神が睨んでくる。しかし笑みは顔から離れない。

「悪い、しかし前から巴の気持ちは知ってたから、やっと、しかもこのタイミング。言うならもっと早く言えばいいものを。」

何か、肩の力が抜けた。すごく、穏やかな気持ちになった気がする。

「大将。」

「な、何かな、優也？」

「戻ったら全力でからかわせてもらうよ。巴共々！」

「言ったな、ならこっちも春香君とクリス君を優也に四六時中くつつかせてやる。」

「…勘弁してくれ。」

そう言って二人で笑った。

「じゃあ、他の皆の様子を見てくるよ。」

大神はそう言って行ってしまった。

暫くぼんやりしていると、また声を掛けられた。

「柊（君、さん）」

「ん、どうしたの二人で？」

春香とクリス、二人が揃って俺の前に立つのは珍しい。

「うん、もうすぐ決戦だからさ、なら柊君と一緒に居ようかって。」

「…それは私が言いたかったのに…。」

まあ、誰がみても非の打ち所の無い美少女二人と一緒に居られる俺は運が良いのだろう。

だから今、どうしても言わなければいけないことを、言うのを躊躇い、ずるずると先延ばしにしていた事を春香達に話した。

「水瀬さん、俺は…メシア、いや、あなたのお姉さんを…」

気付いたのは少し前、巴を奪還する際の言動とちらと見た顔だった。

メシア改め、春香の姉『水瀬 千秋』は俺と同じ機体開発の専門家で、自然の無い未来の大地を嘆いていた。

気持ちも行動も理解できた。しかし、やり方が間違っている。

『同じ血が通う者を操る能力』を作り上げ、目的の為罪無き人々を傷付けた。

「報いは受けなければいけない。…そう言う事だよ柊君。お姉ちゃんもきつと分かってくれる。」

「それに柊さんは水瀬さんを気遣って言わなかったんですね？やっぱり優しいです。」

「そうそう。…でも優しいのは私だけがいいな。」

「またそうやって抜け駆けして柊さん、私に優しい柊さんでいてください！」

やたら姦しくなった二人をみて、辟易したのは秘密だ。

「と、とりあえず、メシアとは俺が決着を着ける。」

「うん。だったら…」

「全部終わったら、私達とデートしてください！」

まさかデートのお誘いを受けるとは思わなかった。

二人とも顔が赤い。かく言う俺も内心パニックだったりする。

(なにをやっている、そこはズバツと…！)

(かなりの場面ですよ大神さん…！)

(行け、優也、行け！)

て言うか、角から見ている馬鹿がいるではないか。

「何してる？」

「や、やあ優也。」

「き、奇遇ですね！」

「そ、それより、『偶然』耳に入った、デートの話はどつするのだ！？」

大神、さくら、巴が口々に『口撃』してくる。

大方、全員見ている筈なので、半ば諦め、答えた。

「暇なときなら。」

「「やったあー!」」

「流星は優也。」

無性に大神が憎たらしくなった。

そうして和気藹々とした時間は過ぎ、遂に聖魔城が見えてきた。

「!?!?あれは…!」

其処には、支援用機体の上に立ち、決戦兵器を展開したメシアと、あの砲台が姿を見せていた。

「大将!先に行く!」

「無茶だ優也!」

「行くべき場所に行くべき奴が行くんだ!大将、迷うなよ!」

「…優也…っ!」

背中に大神の声が届く。それを無視し翔鯨丸から飛び出し、武装を展開し、メシアと対峙する。

「…今日、全てが終わる。私の願いも、あなたとの因縁も。」

「…そうだ。お前達を倒して、俺達は『明日』を歩ませてもらう。」

対峙する俺とメシアを後目に、翔鯨丸が聖魔城に向かう。どうやら、奴も俺にしか興味が無いらしい。

メシアの決戦兵器の発射準備が始まる。

「プロト！」

『了解、決戦兵器、発動。』

こちらにも二門になった決戦兵器を展開し、準備する。

互いに必殺の一撃を叩き込む好機を探る中、聖魔城の砲台が発射体制に入っていた。

（しまった！俺が行けば、メシアに狙い撃ちされる！かといって、メシアを振り切らなければ大将達が…！）

痛恨の判断ミスだ。もう俺がどうこう出来る事態ではなかった。

「今度こそ、終わり。彼等はあの砲台で吹き飛ぶ。残ったあなたは、私が…素敵でしょ？」

「…例え今俺達が倒れても、必ず正義は勝つ。お前達の望む世界は、絶対に訪れない！」

『そうだ、柊！よく言った！』

何処からか、米田の声がした。辺りを見渡すと、翔鯨丸を遙かに上回る巨大な飛行戦艦がいた。

『柊、あの砲台は任せろ！この【ミカサ】で潰す！…あの世でまた会おう！』

そう言って【ミカサ】は砲台に向かっていった。

「そうは…させない！」

メシアがミカサに決戦兵器を向ける。

「無駄だ！俺が立ちはだかつて、お前を手こずらせてやる！」

素早くミカサを背にし、決戦兵器を向ける。

互いの決戦兵器が放たれたのは同時。

俺の意識は、眩い光に覆われた後、闇に消えた。

……

……

……

どれほどの時間が経ったか分からないが、俺は生きていた。

その代償に、大半の武装を持って行かれたが。

俺の体は、聖魔城の麓辺りに墜落していた。

どうにかこうにか、平らな場所にたどり着くと、砲台があった場所に突き刺さるミカサの姿があった。

米田達がどうなっているか、考えたくなかった。

(生きているんだ、間一髪で脱出して無事なんだ！)

そう、自分に言い聞かせた。

城の中に続く道の道中にクリスや春香、黒騎士の武器を見つけた。

その武器を見て、またも自分に生きていると言い聞かせた。

…無意味な現実逃避と分かっているながら。

そして、とうとう現実と向き合う時が来た。城の中に入る扉の前に、動かぬ真紅の【神武】。

「…カナナ？返事をしてくれ…。」

知らぬ間に涙が出ていた。受け入れなければいけないのだ。

…カナナはここで敵を食い止め、散ったのだ。

「…必ず勝つ。見ていてくれ。」

涙を拭い、閉じていた扉を唯一無事だった刃で切り裂き、中に突入した。

城の中を進む度、彼女達の最後を直視しなければいけなかった。

(…大将にさくら、巴はまだ見てない…先に居るのか…?)

どれほど進んだか分からないが、眼前に巨大な扉が現れた。

扉は開いている。

畏の可能性もあるが、此処まで来た以上、退く訳にはいかない。

意を決し、扉をくぐった。

扉の先には、大神達の神武があった。

しかし、さくらと巴の神武はびくりとも動かない。

「大将！」

俺は必死に大神に呼びかけた。

「優也…生きていてなりよりだ。」

大神の声は沈痛そのものだった。

辺りを見ると、春に見たあの機体が横たわっていた。

「…あれは？」

「…あれには、あやめさんが…。あやめさんは…あやめさんは…もう…」

もう何も聞かなくても理解できた。俺達の知る『藤枝 あやめ』は死んだのだ。

大神は、死してなお、冒瀆されるあやめを、救ったのだ。

「…そうだ、大将。又丹は？奴は何処に？」

「！優也、伏せろ！」

大神の声に素早く反応し、伏せた俺の頭上を刀が通過した。

「避けたか。運がいいな。」

「又丹！」

「全く、殺女め。どうせならもつと手こずらせればいいものを。やはり、使えんな。」

こちらを気にする素振りも見せず、又丹は淡々と呟いていた。

「まあ、いい。結局、貴様等は我が【神威】にひれ伏す事になるのだ！」

そう言つて、又丹は【神威】を駆り、俺達に襲いかかった。

疲労困憊の大神と武装の大半が無い俺。

どうみても優劣は明らかだった。

…『コンディション』だけ、は。

「大将、合わせる！！」

「分かっている、優也！」

「「はあっ！！」」

「馬鹿な…既に満身創痍の貴様等が何故ここまで戦える!？」

何故?そんなの、決まってる!

「仲間が…散った仲間達の『心』が力を貸してくれるんだ!」

神威の脚を刃で断つ。その衝撃で刃は、俺の最後の武器は無くなった。

だが、まだ力は残っている!!

「大将!!」

「ああ【狼虎滅却 無双天威】!!」

大神渾身の必殺技が神威を両断した。

「まだだ…まだ…!」

全て言う前に、又丹は息絶えた。

「…終わった。終わったけど…。」

俺も大神も喜びはしなかった。

確かに勝利はした。しかし、その代償に仲間を失い、喜べる訳がなかった。

「大将、行こう。皆に勝利を報告しないと…。」

『違うな。貴様等は勝利などしていない。』

「!?!嘘だろ、又丹、生きていたのか!？」

しかし、神威を両断したのはこの目で見た。生きている筈はない！！

『又丹？違うな…。俺は、【サタン】！！』

そう言うと、又丹の死体が浮かび上がった。そして、その姿を、角を生やした黒衣の魔神に変えた。

『来たれ！来たれ！来たれ！この世を、絶望で染め上げてくれる！』

サタンの言葉と共に、脳裏に世界中の都市が火の海になっている光景がよぎった。

「や、止める！お前だつて元々、世界の一部だろう！？」

『止めたくば、抗え！だがまあ抗う術は無いだろうがな。』

サタンの嘲りが響く。

…例え、何も手が無くとも抗う、それが人がすべき事なんだ。

「…大将、刀、借りる。」

「一人ではさせないさ。一緒にやろう。」

大神の【神武】の太刀を受け取り、サタンに挑む。

『…お待ちなさい。勇気と優しさを知る者達。』

と、今まさにサタンに向けて駆け出そうとした俺達を、予想外の声
が呼び止めた。

「この声…は…!?!」

大神の声が掠れている。無論、俺も驚いてはいる。

背後を見た俺達は見た。又丹の様に、背から純白の翼を生やし、繋ぎ目の一切無い天の衣を身にまとった天使にその身を変えたあやめの姿を。

「あやめ、さん？」

「…いいえ、私は【ミカエル】。サタンと対をなす者。」

「ミカエル…忌々しい…!」

「サタン…まだ諦められぬのですか？」

「どれほど時が経とうが、関係ない！俺を否定した神が悪いのだ！」

ミカエルとサタンの言い争いが続く。

「今ならまだ間に合います。主に謝罪し、罪を償いましょう。」

「罪だと!? 笑わせる!」

「最早言葉は届かないのですね…。」

どうやらミカエルの説得は失敗のようだ。

「さあ、ミカエル、俺を連れて行きたければ、俺を倒せ！まあ、貴様の力では不可能だがな!!」

サタンは自信を持って言った。確かに、ミカエルの力だけでは無理に決まっている。

「ミカエル、さん。俺達がやる。下がってくれ。」

「…何故？」

「この戦いは、俺達が始めたんだ。他人に最後を任せるなんて、俺の仲間も、【帝国華激団】の皆は許さない!!」

目には見えないが確かに皆が、華激団の仲間等がここにいた。

『分かりました、総てをあなた達に…。そして、これは少しばかりの力添えです。』

そう言ったミカエルから暖かな光が溢れた。

その光は俺達を包み込み、光が収まった後、俺達を【奇跡】が待っていた。

「隊長、遅くなっちゃった!」

「カンナ!」

「花組の『トップスター』は伊達でなくってよ?」「スマイレ君!」

「隊長、花組、集合しました。」

「マリア、皆!」

なんと、散った皆が再び俺達の前に立っている!

「柊君!」

「お待たせしました!」

「遅れたようだな。」

少し遅れて、春香、クリス、黒騎士が俺の周りに来た。

「皆…今は喜ぶのは早い、さあ、大将!とびっきりの号令を!」

「ああ!…帝国華激団、花組、出撃せよ!」

大神の雄々しい号令が響く、勿論、皆も最高の返事を返す。

「了解！！！！」

これで、本当に最後にする！

地球の遙か上、瞬く星の海で今、最後の戦いが始まった。

『まずは角と額の宝玉を狙うのです！』

「了解、ミカエルさん！！」

完全再生した俺の機体は、今まで以上に調子が良かった。

ミカエルの指示に従い、俺、マリア、紅蘭が頭部に射撃を集中させる。

「マリアさん、紅蘭！角を頼む！俺が宝玉を！」

「ええ！」

「任されたで！」

背部の決戦兵器を展開し、照準を合わせる。

「行くぞ！！」

今まさに発射しようとしたその時、突如として襲来した金の影が、俺の首を掴み、サタンから引き離した。

「生きてたか、メシア！」

「あの一撃は少々厄介だったけど、ね。」

体制を立て直し、襲ったソイツを見ると、そこには、無駄な装甲を排除したメシアがいた。

「優也、今行く！」

「待ってくれ、大将、皆！ここは俺に任せてくれ！」

近寄る大神達を制し、メシアと向き合う。

「これで終わりにしよう、メシア、いや、水瀬博士。」

「…ええ。…終わらせましょう。」

言葉を交えさせる間に、刃がぶつかる。

「人は変わらない！いつまでも戦いを止められない！」

「だが、いつでもそれを止めようとする者は必ずいる！」

「戯れ言を！」

刃を銃に、銃を刃に変え、一進一退の攻防が続く。

「人は、人は貴女が思う程愚かじゃない！！」

俺の機体から純白の光が溢れる。同時に、【エンジェル・ハイロウ】が起動した。

「例え間違えても、また立ち上がり、やり直せる！」

漆黒の宇宙に純白の翼が瞬く。

そして、遂に均衡が破られた。

水瀬博士の機体の刃を、弾いたのだ。

「これで、決める!!」

刃を向け、一直線に突撃する。

水瀬博士が『福音』を放つ。

物凄い衝撃が俺を襲う。しかし、俺は止まらない!!

「おおおっ…!」

雄叫びを上げ、水瀬博士に渾身の一撃をお見舞いする。

「…」

俺の刃は、届いた。一年前、簡単にあしらわれた刃が今、水瀬博士の腹部を深々と貫通していた。

「終わりだ…。俺は…。」

「それ…以上…言わなくて…いいわ…。」

「水瀬博士…。」

「ふふっ…あんなに小さい優也君が…強くなったね…。」

水瀬博士の声は優しかった。

「でも、ね、諦められない…私は…。」

「分かっている…。」

世界中を緑で溢れる光景にする。彼女の口癖だった。

「見ていてくれ…。」

「…?」

「俺達は戦いを起こさない、起こさせないように努力する。だから…。」

「…ええ、見ている。…間違えたら…叱りに、行くからね…。」

「…はい…。」

「さあ…イキナサイ…」

「!? 水瀬博士!?!」

水瀬博士は刃を、俺の腕を引き抜き、俺を押しとばした。そして、大爆発。

「博士…っ!」

「ええい、無駄だ!」

「くっ…!」

『俺の』戦いは終わった。しかし、まだ『帝国華激団』としての戦いが残っている!

「大将!」

「優也、行けるのか!?!」

「ちつよと遠いが、きついの叩き込む!最後は任せるぜ、皆さん!」

「…了解!」

機体から、光が飛び出る。光は12に分かれ、人の形に収束した。

「プロト！」

『了解、最終戦闘形態、発動。』

俺を中央に据え、12の機体が時計回りに並ぶ。

『決戦兵器、起動。』

プロトの声に反応し、

13の機体が最終兵器を展開する。

「計十四門の決戦兵器、受けてもらっ！」

出力が上がっていく。

「発射ああああ！！！！」

絶対的な破壊力の一撃がサタンを襲う。

『ぐっつ！！だがこの程度…！！』

「大将、決めてやれ！」

俺の一撃が当たった瞬間、大神は必殺技を放っていた！！

「【狼虎滅却 天下無双】！！」

その一撃は、サタンの核を完璧に貫いていた。

『ぐぐおおおお！！』

サタンの絶叫が響く。

俺達は、最後の戦いに勝利した。

最終話 桜（前書き）

最終話

桜

最終話 桜

「…早いもんだな、あやめさん。」

今俺は、ある『墓』に語りかけていた。

「今でも思い出すよ、あの時のこと。」

墓を見ながら思いを馳せる。

全ての決着がついた、あの日を思いだす。

『これは…何かの…間違いだ…!』

核を穿たれ、本の大きさに戻ったサタンが呻く。

『サタン…。』

『…笑いたくば笑え。』

『いいえ、笑いません。…帰りましょう。』

『…今更戻ったとて、無駄だ。』

『それは違います、あなたを愛する私がずっと傍にいます。』

…こつという話は苦手なんだが。

『…ふん。』

『行きましょう、サタン。』

サタンはゆつくりと、天に昇っていった。

『…良いのか？最後の別れを言わなくて？』

あやめを囲む大神達を見ている俺をプロトがせつつく。

「…いいんだ。別れは【終わり】じゃない。」

『…了解。』

そして、あやめも天へ昇っていく。

俺は敬礼し、あやめを見送った。

「…本当に、終わったな、優也。」

「いや、終わりじゃなく、始まりだよ、大将。」

これから世界中で復興が始まる。勿論、帝都も例外ではない。

「これからが忙しいぞ。」

『分かってんじゃねえか、柊！』

「!?!?」

なんと、米田が瓦礫の山をよじ登ってきたではないか！

「俺も死んだと思ったがな、生きてたよ！さあ、柊！約束通り、宴会だ！大宴会だ！！」

周りから、歓声が上がった。騒ぐのは好きじゃないが、今回は特別だ。

「その前に、皆さん、お忘れじゃありませんか？」

さくらが楽しそうに言う。

「確かに、忘れてた！」

「それじゃあ、『勝利のポーズ、決めっ！！』」

ポーズを取り、皆で笑った。

その後、本当に三日三晩宴会が続いた。

どれだけ騒いだが、記憶にない。それだけの宴会だった。

それから、帝国歌劇団の女優総出演の復興公演が行われ、過去最高の入場者を記録した。

「…これ位が、最近の報告だあやめさん。」

墓には『藤枝 あやめ』と彫っており、数え切れない花が供えられていた。

「あやめさん、俺、少し、此处を離れなきゃいけないかった。」

大神も少し前に辞令が来て、もうすぐ発つらしい。

「欧州のパリに行けってさ。」

米田曰わく、パリの極秘プロジェクトに協力しろ、とのこと。

「ちよつと…行つてくるよ。」

あやめの墓を後にし、桜並木の道を歩く。

俺は、水瀬博士の最後の言葉を考えていた。

(イキナサイ…はたして、『生き』なのか『行き』なのか…)

水瀬と言えば、

(あの時鞆を送ってくれたのは、水瀬さんだろうか?)

歩きながら考えていると、

「「柊(君、さん)!!」「

「!?!」

いきなり呼ばれて、驚いた。

「柊君、パリに行くんだよね?」

「え、ええ、まあ…。」

「柊さん、約束、覚えてます?」

「覚えているけど…。」

「「なら、私とデートして!!」「」

ああ、神様。これは試練ですか?

「ちよつと!柊君とは私の方が付き合い長いんだよ?譲つてよ!」
「何言ってるんですか!むしろそっちが譲ってください!」

うわ、口論になった。…こつこつ場合の結論が分かるのが悲しい。

「なら柊君に決めてもらおう!」

「そうですね…柊さん!」

「私達のどっちと…」

「デートしたい?」

やっぱり俺に聞いてきた。

「う…、えーあーその…」

「どっち?」

…仕方がない。

「逃げるぞプロト。」

『了解。』

二人の隙をつき、走る。

「あつ!どこ行くの!?!」

「そんな質問、勘弁してくれ!」

「逃がさない!」

美少女二人と桜並木の中鬼ごっこ。

帝都は、太正時代は平和だ。

とりあえず、今俺が優先すべきは、

「「待てえええ！！」」

猛スピードで追ってくる女から逃げ切ることだ。

最終話 桜（後書き）

作者です。

ようやくこの作品、完結致しました。

こんな駄目作者に辛抱強くお付き合いいただいた皆様には感謝してもしきれません。

少し、作中で詳しい描写をしなかった優也達の機体設定をここで。

優也機

ダブルオーライザーON3ソード+ガンダムOX。

ビットが六つから十二に増えた。

黒騎士機

イメージはガンダムデスサ○ズヘル。

優也から受け取ったブラックスミスと爪が融合し、エネルギー攻撃を無力化する鎌に変化した。

春香機

機体イメージはフリーダムガ○ダム。

千秋機

機体イメージは、ガンダムヴァーオーゴ○B。

支援兵器がガンダム○シユタロンH○。

巴機

ディテールは大神機のブースターと角を外した状態。必殺技は『天地昇竜斬』。

はい、本当は、別の場所で書けばよかったのですが、適当な場所がなく、ここに書かせていただきました。

さて、続編は…考えてません。感想とかで、見たい！とか言われると、書くかもしれません。

長々とお付き合いありがとうございました。

それでは、また、どこかで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3696k/>

サクラ大戦～新たなる剣～

2011年2月4日10時41分発行